

螢池東

遺跡発掘調査報告書

1991

螢池東遺跡調査会

螢池東

遺跡発掘調査報告書

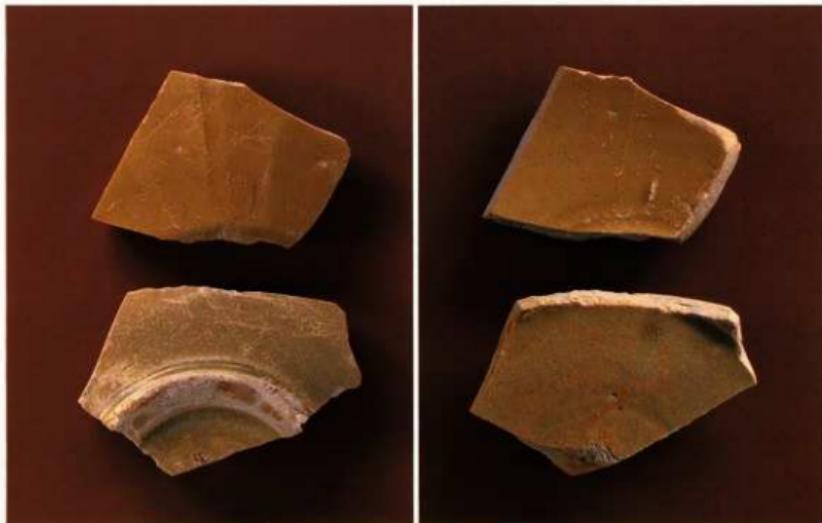
1991

螢池東遺跡調査会

卷頭カラー図版



遺跡全景



包含層出土青磁

例　　言

- 1、本書は、朝日生命保険相互会社から螢池東遺跡調査会に委託された、大阪府豊中市螢池東町2-11所在の螢池東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査、および遺物整理に関する費用は、朝日生命保険相互会社が負担した。
- 3、調査組織は後に掲げる。調査の実施にあたっては、豊中市教育委員会と螢池東遺跡調査会との間で1991年3月1日付で、「埋蔵文化財調査に対する協定書」を締結している。
- 4、作業員および機械などについては、株式会社鴻池組の関係各位はじめ、安西工業株式会社の協力をえた。また遺物整理の一部および自然科学分析については株式会社夏原技研に委託した。
- 5、本書は、中村が編集したが、この間、海住智子（元大谷女子大学資料館職員）、安井かおり（大谷女子大学資料館職員）、大谷女子大学考古学研究会の協力をえた。

はしがき

大阪府の北郊、豊中は府下でも一、二を争う都市化の進んだ地域であるといえよう。しかし近年では、その第二の都市化現象ともいえる再開発工事が目白押しで、かつての建設ラッシュと相似した状況が生じている。

1970年の大坂万国博覧会開催の前年に慌しく行われた中国道などの建設に伴う宮の前遺跡（現螢池北遺跡）の調査は、弥生時代の古墳時代の集落、墳墓群などを検出し、多くの成果をあげた。この調査が当該地での本格的な大規模開発に伴う発掘調査の代表的なものであった。

近年の再開発は、比較的小規模で、数量的にはかなり多いことが特徴としてあげられる。これらは一つの単位は小さいが、総合すると相当な面積に及び、従来の大規模開発に匹敵する面積にもなるだろう。

今回調査を実施した螢池東遺跡も、再開発に類するものであり、調査の結果は、溝、土壌、ピットなどではあったが、近接して集落などの存在が推定されるという成果をえた。これらの点的調査の成果が、やがてはいずれまとまった形で大きなものになることを期待している。

最後に調査に際して、種々ご配慮いただいた朝日生命保険相互会社、株式会社鴻池組の関係各位はじめ、さらに円滑な遂行に協力いただいた安西工業株式会社、株式会社夏原技研に対して感謝するものである。

1991年5月

螢池東遺跡調査会会长

中 村 浩

本文目次

はしがき 例言	
第1章 調査経過	1
1、調査に至る経過	
2、調査の経過	
3、日誌抄	
第2章 位置と環境	8
第3章 検出遺構	11
1、概 観	
2、層位関係	
3、遺構各説	
4、小 結	
第4章 出土遺物	17
1、概 観	
2、遺物各説	
3、小 結	
付 蟻池東遺跡における花粉分析および プラント・オパール分析	24

図版目次

- 図版 1 調査地及び周辺遺跡
図版 2 遺構実測図
図版 3 遺構実測図（各壁セクション実測図）
図版 4 遺構実測図（SD01、04）
図版 5 遺構実測図（SD02、03、07、SX16、09、SE01）
図版 6 遺物実測図（E区、SD02、C区、SX09、SD04、A区、SD01、J区出土）
図版 7 遺物実測図（C区、DX区、E区、F区、J区、SD01、SD02、SD03、SD04、SD07、SX09、SX16、表採）
図版 8 遺物実測図（表採、J区、SD04、K区、SD02、C区、SX09、F区出土）
図版 9 遺物実測図（SD01、SD03、SD05、SD07出土）
図版 10 遺物実測図（SD04、SX22、SX02、SE01、SX32、E区出土）
図版 11 遺物実測図（J区、A区、北セクション、E区、SD03、SD01、表採）

図版 12 遺構写真（調査地全景）
図版 13 遺構写真（SD01～06溝及びピット群全景及び細部）
図版 14 遺構写真（SD01溝全景及び細部）
図版 15 遺構写真（SD04溝全景及び細部）
図版 16 遺構写真（SE01井戸、SD05、04溝など及び細部）
図版 17 遺構写真（SD02、06、07溝全景及びSD07細部）
図版 18 遺構写真（SX09周辺全景及び細部）
図版 19 遺構写真（SX16及び周辺ピット群）
図版 20 遺構写真（ピット群全景及び深掘トレンチ）
図版 21 遺物写真（瓦、土師器、須恵器）
図版 22 遺物写真（土師器、須恵器）
図版 23 遺物写真（墻体部内外面叩きの状況）

挿図、表目次

- 図1、周辺遺跡と位置図
図2、螢池西遺跡、遺構と遺物
図3、深掘りトレンチ実測図
図4、螢池東遺跡のプラント・オパール分布図
図5、螢池東遺跡の花粉化石
図6、螢池東遺跡のプラント・オパール
- 表1、各地区、遺構別遺物出土状況
表2、螢池東遺跡の産出花粉化石一覧表
表3、試料1g当りのプラント・オパール個数
表4、各植物の植物体量

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過

北大阪の中心都市豊中市は、大阪空港と千里ニュータウンを擁する大都市である。とくに近年の再開発の波は、大阪の衛星都市にも及んでおり、豊中市はそのもっとも顕著な地域の一つである。

当該豊中市の一角に営業所を構えている朝日生命保険相互会社では、その営業所ビル改築工事に着手するべく、諸手続きを開始した。この時点で、該当地に埋蔵文化財の有無について市教育委員会に指導を求めたところ、平成3年1月18日、豊中市教育委員会の担当者によって試掘調査が行われた。この結果、溝を含む何らかの遺構と若干の遺物が採集された。このことから当該地に遺跡の存在が予想されるということになり、正式の発掘調査が必要という指示があった。

市教育委員会の正式調査の指示を得て、本格的調査に着手することとなったが、市側では既に今年度から来年度に掛けての予定事業が目白押しであり、少なくとも10ヶ月以上の順番待ちをするか、あるいは別個民間の担当者を選任し依頼するかという二者の選択を求められることとなった。

やがて工事施工業者の株式会社鴻池組と朝日生命保険相互会社との協議によって、工事開始を少なくとも7~8月とすることで一致を見、これにより市側の外の担当者を求めることがとなった。

かつて株式会社鴻池組の工事施行地域の文化財調査を担当したことのあった大谷女子大学考古学研究室中村浩助教授にこの件を相談した結果、螢池東遺跡調査会を新たに組織し、その担当者となることを承諾頂いた。なお、この際に調査後の遺物の処置などについて、調査完了後、市側に資料共々返却することを盛り込んで、別途豊中市教育委員会と埋蔵文化財調査に関する協定書を締結すること、さらに事務手続については螢池東遺跡調査会が代行することで一応の合意を見た。

これらの協議を踏まえて、朝日生命保険相互会社と螢池東遺跡調査会の両者で調査に関する埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、また埋蔵文化財発掘調査届けなど必要手続きをへて、平成3年3月2日から現地調査に着手した。調査開始後の経過に

については次項を参照されたい。

なお当該調査に関する関係者および組織は以下の如くである。

豊池東遺跡調査会

会長（調査主任）	大谷女子大学考古学研究室	助教授 中村 浩 (現 教授)
調査員		写真家 阿南辰秀 伊藤慎司 夏原信義
調査補助員	大谷女子大学考古学研究会	安井かおり・吉岡幸子 関井澄子・松本美紀 森下真也子・小沢 清 森田茂美・疋田真紀子
関係協力者	奈良文化女子短期大学学生 朝日生命保険相互会社 株式会社鴻池組	葛下ゆかり・松浦慶子 熊沢泰弘・港 晴吾 林 澄男
その他関係業者	安西工業株式会社、写測エンジニアリング株式会社 株式会社夏原技研	

以上

2. 調査の経過

調査は平成3年3月2日（土）に着手した。上屋建物の撤去は完了していたが、それらの地下の廃材などはそのままであった。また調査の対象となる地表下約1メートルまでの掘り下げ作業は、工事用機械を用いて実施しているが、排土の処分が思うに任せず、本日は全体の3～4割程度までしか進まなかった。さらに日曜日の作業については、特定建設作業となるため、中止のやむなきに至った。なお側溝の設定を重点的に行う。これによって雨水の除去がスムースに行えるものと考えられる。

造構面までの上砂排出は、ほぼ5日までかかってしまった。なお平行して造構検出作業を行っていたので、とくに手持ち状態になることはなかったようである。5日には、全体の造構の状態が把握できるようになってきた。とくに中心部には斜め方向に1本溝が走っている。またこれに平行して南北にも溝が見られる。とくに住居などの

遺構はこの段階での現状では確認できない。遺物の出土は、多い様である。

5日からは遺構内部の土砂除去作業を開始する。溝についてはいずれも上層確認用のセクションを残して作業を進める。各遺構についても検出順に番号を付していく様にする。各方向の側壁については、遺構検出と平行して実測作業を進める。とくに全体が残されている面ではなく、いずれも攪乱が半分以上を占めているのが現状である。湧水は、比較的多かったが、これらはいずれも雨水の流れ込みによるものと見られ、とくに井戸内部などでの湧き水は、ごく一部しか見られなかった。

遺構検出作業は順調に進んでいったが、途中に降雨のため再三再四同じ部分の清掃を行うはめとなってしまった。8日には、ほぼ遺構の検出が完了段階に入っており、遺構内部の遺物とともに写真撮影を行う。またあわせて記録写真については随時撮影を行う。中央部の攪乱部分について、丁寧に調査検討を行ったが、全く遺構の遺存が見られなかった。したがって当該部分に遺構内部からの排出土砂を置く事とする。なお写真撮影には少々邪魔であったので、除去した部分もある。写真撮影の準備が完了した矢先の8日午後には降雨、9日に再び清掃という繰り返しである。写真を先行させるという方針を変更し、実測から行うこととして、全員に指示する。実測は一部については行っていたが、遺構については割り付け作業の完了を待って行うこととした。10日は、天候もよく遺物の取り上げ作業、遺構の実測作業が進展した。また余分なセクションについてもこの段階で除去して明日の全体写真に備えることとする。なおこの段階で炉跡の確認やビットの確認があった。これらは当初から明らかであったものもあるが、大半は降雨によって鮮明となったものも多い。しかし、ビットもおたがいに関連を求められるものが少なく、建物を構成するものはほとんどないかもしれない。この点、整理段階での検討を待ちたい。

写真撮影、実測作業の進展に伴って、自然科学の分析試料の採取も行っていった。とくに花粉分析、プランツ・オパール分析の試料について採取した。これらの作業が一応完了する段階から、さらに下層に遺構の存在があるのかどうかについて、深掘りを行った。これは遺構検出面からさらに1~2メートル下層まで掘り進めたもので、土質が砂礫質に変化することが明らかとなった。しかし遺構、遺物はなんら検出されなかった。これらのセクションの実測作業などをへて、3月13日に、ほぼ現地の作業は完了した。

なお調査範囲が交通頻繁な道路側に面していることもあり、市教育委員会の指示を仰いで出来るだけはやく埋め戻しを行う様に依頼して現地を後にした。

遺物や機材についても、当日大学研究室へ搬入を終えた。

3. 日誌抄

1991(平成3)年

3月 1日 調査用機材の準備および点検作業を終日大学資料館で行う。

3月 2日 調査開始。機材類を大学資料館から搬入。上砂の搬出が意外と手間取るようである。したがって、調査は上砂の搬出が完了した部分から行う事とし、とくに事故のないように注意を喚起しながら行う。全体の建築予定部分を掘り下げることは周囲の状況から判断するかぎり、崩落の危険がある。したがってこの危険を避けるため、周囲に幅2m前後の上手を残すことにする。上砂排出部分について、地山の検出作業を実施。東側のセクションがほぼ検出完了状態だったので、実測作業を行う。あわせて写真による記録も採る。なお報告書用の写真についてはできるだけ専門家に任せると、とくに急を要するものや随時の記録は出来るだけ多く撮影し記録を残すこととする。

3月 3日 本日は日曜日であり、かつ建設機械類の作業ができないため、終日休みとする。

3月 4日 先日来の降雨に伴って、調査地域の湧水が多く、作業の妨げとなっている。周囲の溝ではそれらを排水不可能と判断したため、攪乱部分2か所について深く掘り下げてそこからポンプで排水することにする。作業内容は、地表面および遺構面の確認および検出作業である。本日の終了段階でほぼ全体の4/5まで進展している。北側セクションの実測、写真撮影。西側セクションの実測準備および写真撮影を行う。調査区域内で遺構の確認が行われはじめている。北西部では井戸らしき痕跡、東側部分および中央では溝が、おのの確認されている。なおまだ遺構内部の検出作業を行っていないので、時期などは不明である。遺物は、地山と耕作土との間の包含層から検出されるものが大半である。いずれも断面が摩耗しており、流出あるいは流入してきたものであることが分かる。採集遺物の一部については事務所で水洗作業に入っているが、その観察は採集時の段階とは変わらないものである。

3月 5日 本日土砂排出が完了した。これによって全体の調査が軌道に乗ることになる。遺構検出作業は続行しているが、大きな変化は見られない。なお中央部分にはかつての建物の基礎が集中しており、丁寧に土砂を排出して検討したが、すべて搅乱によって遺構面が失われていることが明らかになった。また遺物の採集も全く期待できないことが判明したため、当該部分を遺構中の排出土砂の捨て場として用いることにする。西側セクション実測作業。

3月 6日 遺構検出作業を終日行う。気温がうなぎ上りに上り、ついに最高気温を記録した。(17°C) 作業は進展した。確認できた遺構には、その順に番号を付していく。また遺構の種類によってアルファベットをその前に配置する。この結果確認された遺構は、溝では SD 1・2・3・4・5・6・7 の 7か所、井戸は SE 1 の 1か所ほかに不明の遺構が 2か所確認された。なお SD 1、2、4 の周辺にはまだかなり厚い包含層が残っており、その下層から遺構の検出は十分考えられる。溝の方向は、ほぼ調査地域を斜めに横断するもので、一部溝を横断するようなもの (SD 3) もある。なお方向から見て SD 2 の延長が SD 6 となる可能性も持つ。遺物は各遺構共に比較的少ないことが分かった。

3月 7日 遺構の検出作業が終盤に入った。地域内の国土座標の設置作業も順調に進んでいるようである。SE 1 については、余り深いものではないような印象があったが、調査を進めていくうちに約 80 cm 程度の深さのものとなった。SD 1、4 については幅が広く、中央部分ではかなり深くなっていることが分かる。先に SD 5 としたものは、複数の溝が交差していることが明らかとなってきた。各遺構の掘り下げ作業が順調に進展する。一部の遺構については、ほぼ検出が完了したので清掃を行い、写真撮影を行う。南側セクションの清掃、実測作業も順調に進んでいる。

3月 8日 南側セクションの写真撮影、実測の完了。自然科学分析の資料採取を行う。SD 2、SD 4、SE 1 について花粉分析、SD 2 はプラントオパール分析についても行う。各遺構内部に残していたセクションの実測を行う。遺構内部の遺物写真撮影。適宜記録写真の撮影を行う。降雨のため養生をして退避する。

3月 9日 排水作業で午前中の半分は費やされてしまった。全体の割り付け作業を並行して行う。実測段階の割り振りもあわせて行う。SD 1~4 周辺地域の検討を行う。炉跡の痕跡を確認する。また周辺から多くのビットを検出するが、それらがお互

いに、どのような関連を持つのかは不明である。この部分を中心にして遺構検出作業を続行する。なお現地表面の標高は 26.659m 前後である。

3月10日 全体の遺構検出作業は続行するが、あわせて遺構実測の作業を行う。なお遺構の検出が完了したので、中央部分攪乱の盛り土を平坦にして写真には目立たないようにする。遺物写真と全体写真の場合、後者についてはホワイトを入れて撮影し、前者はホワイトを入れないで行うこととする。本日遺物の写真についてはほぼ完了する。完了部分については実測図が完成するのを待って、レベルを記録してから遺物を探りあげることにする。遺物取上げ後についてはホワイトを入れておくように指示。SD1、3、南側セクションについて花粉分析試料採取。実測作業と遺構検出作業を平行して行っているため、実測完了後に新たに検出されるピットがいくつかあり、若干の混乱を来したようである。

3月11日 降雨のためせっかくの写真撮影の準備もふいになってしまった。一部降雨のため崩落の危険がある場所ができ、土裏で養生を行う。また少し雨足が緩やかなときには排水作業を適宜行ったが、遺構内部については荒れるため出来るだけ入らずに作業を進めた。

3月12日 写真撮影の準備作業。全体の清掃とホワイトを書き込む作業を行う。なお遺物については写真撮影の完了部分について採取していく。再度ピット検出作業を行う。わずかながら確認できた。写真撮影が漸く完了する。

3月13日 実測作業の検討を終日行う。遺物の採集についても合わせて実施する。なおピットが新たにトレンチの端から検出され、内部には柱痕と見られる木質が残されていた。明らかに人為的なピットに伴うものであり、自然の状態ではないことは明らかである。この関連のピットについては調査対象外になるため不明とせざるをえないが、少なくとも今回の調査地に隣接して、何らかの建物遺構が所在していたことだけは明らかであり、今後の調査に期待するものもある。自然科学分析の試料採取を行う。遺物の点検、機材、図面の点検を経て現地調査は一応完了した。

3月14日 資料館にて遺物、図面の確認。機材の点検作業を行う。なお遺物整理についても合わせて本日から開始する。

* 遺物整理については、現地調査のように大きな作業の変化はないため日誌は省略する。なお作業の内容は、遺物の水洗、注記、分類記録、拓本採取、実測図の作成、鏡

察記録の作成などである。また実測図の整理製図などについては、株式会社夏原技研に委託して、その作業を行った。これらの一連の作業を経て、4月の後半から印刷会社に原稿を入稿し、校正作業などを経て報告書としての成果品が完成したのである。

この間、現地調査に参加した学生諸姉をはじめご指導、協力頂いた関係機関、諸官庁の方々に厚く感謝の意を表するものである。さらに難解な原稿を読みあわせ、かつ無理な構成を聞き入れながら作業を進められたサンキ印刷株式会社勝野晃氏、また校正をはじめとして、今回の報告書作成に当たって種々ご協力頂いた元大谷女子大学資料館職員海住智子氏に対し厚く感謝するものである。

第2章 位置と環境

豊中市の北部、池田市に近い阪急電鉄蛍池駅の北東100m前後に位置する。国道170号線に沿った市街地の中に含まれている。周辺はマンションが立ち並び、あわせて南北地域には商業ビル、銀行などが所在する。

国道170号線は、当該地から北へ約100m部分で大阪国際空港、さらに200m余りでは近畿自動車道および中央環状線と分岐している。このように交通の要衝にあるため、毎日の交通量は著しいものがあり、まさに大阪の動脈道路の一つであると

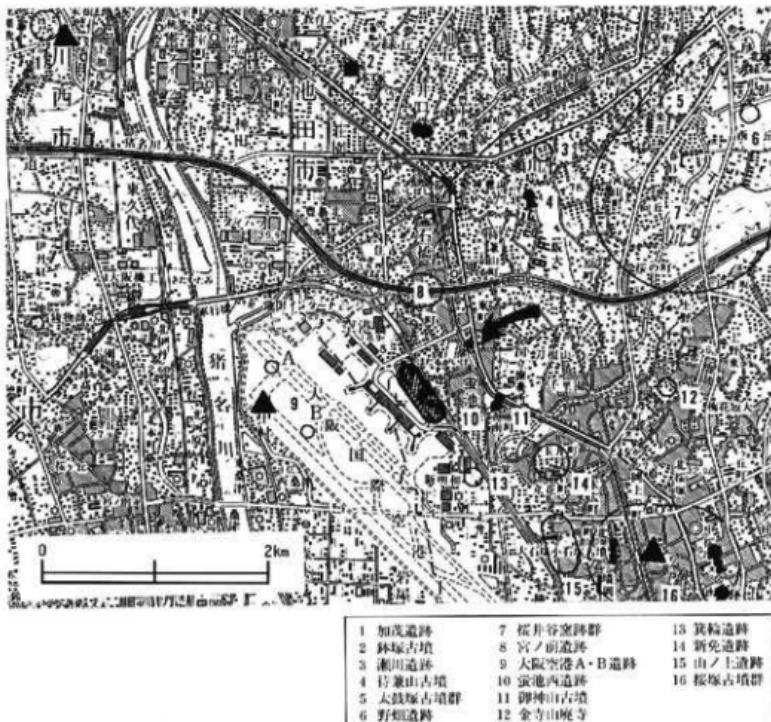


図1 周辺遺跡と位置図

いう実感がある。

ところで豊中市は地形的に丘陵部地域と平野部地域に大きく二つに区分することができる。すなわち市域の北部に丘陵部分は集中しており、南側から南西地域には平野台地部分が広がっている。

調査の対象となった螢池東遺跡は、この区分に従うと北部の丘陵部に属している。千里川の北岸には、待兼山丘陵が南北に伸びている。この丘陵の中央部付近から西に派生する丘陵の裾部に近い緩やかな斜面の台地あるいは丘陵地部分に、遺跡は形成されている。

さらに注意深く、地形図を観察すれば、当該遺跡の北部には東西に伸びる深い谷が横たわっているのが確認される。この谷を境として、北側にも同様な緩やかな台地が広がっているのがわかる。この緩やかな傾斜をもつ台地は、南側へ傾斜しながら下がっている。やがてこの台地は再び、箕面川、千里川あるいはそれらが注ぐ猪名川によって作られた谷へと連なっていく。

とくに当該遺跡の北部域に展開する螢池北遺跡は、かって宮の前遺跡と呼称された部分を含む、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群および集落遺跡である。これらの状況については、すでに大阪府教育委員会の調査を始め、市教育委員会の調査によつて、かなり正確に捕捉される段階に至っていると考えられる。

また阪急電鉄を挟んで西側に展開する螢池西遺跡については、今回の調査と同様、

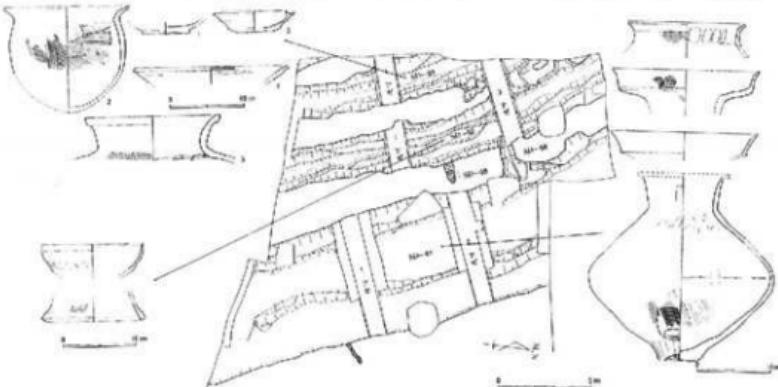


図2 螢池西遺跡 遺構と遺物（『螢池西遺構』豊中市教育委員会、1988 を改変）

溝がいくつか確認されたにすぎないが、時期的には弥生時代であり、当該遺跡よりは先行するものである。また報告では古墳時代後半のものも含まれているとあるが、それが見られたとしても、地理的な差異は埋まらない。すなわちこれらとは全く個別の遺跡が存在すると見るのが妥当ということになる。

すでに近接して北、西に時代の異なる遺跡が所在しており、当該遺跡は向者とは全く独立した集落遺跡の可能性が濃い。今回の調査では、明らかに建物という痕跡は確認したが、その広がりまでは追求できなかった。しかし遺構内部からの遺物の状況から、ある程度の時期的な広がりは推定可能である。すなわち当該遺跡周辺の集落では古墳時代末期の7世紀頃から生活痕跡が見られるようになり、やがて奈良時代、平安時代まで継続するが、少なくとも平安時代段階ではその痕跡はかなり希薄なものとなっている。また中世の遺物が採集されているが、これらはその延長上の遺跡ではなく、全く後世に出現した生活痕跡の一つと考えたい。

第3章 検出遺構

1. 概観

調査の範囲は比較的狭い限られたものではあったが、当初予想されたほどの擾乱も見られず、溝を中心として各種の遺構を検出することができた。これらの個別の解説は後に行うが、まずこれらの調査の方法、とくに区画区分について先ず触れておかねばならないだろう。

調査は、調査経過でも触れたように先ず堆積土砂を排除することから開始し、それが完了後に遺構検出作業を行った。しかし遺構検出開始段階には、国土座標の移動などの測量、割り付けが完了していなかったため、仮にトレンチの端から計測を行って地点の記録を行った。やがて国土座標の移動が完了したのを受けて、正式に区画設定を行い、当初の仮地点表記についてもこれらに従った新しい表記とした。

区画は、5メートル四方の正方形のグリッドを設定し、それぞれに名称を付すものとした。またその基準としたY軸は、Y = 50155、-50150、-50145であり、X軸は、X = -133785、-133、790の各々である。またこの座標までの経過については、省略する。

この区画は、調査範囲を覆うものであり、かつ今後の調査でもその対象が可能なよう配慮した。区画は北西部端から東にA、B、C、D区とし、再び西端に戻って、E、F、G、H区とする。さらに西端に戻って、I、J、K、L区とした。これによつて調査対象地域は、AからL区の合計12区画に区分することになった。なおこれらの区画のうち5メートル四方がすべて含まれているのは、F、G区のみであり、ほかの区画はいずれも一部から大半まで多様である。

これらの区画で説明するとG区の大半は、擾乱によって遺構が失われている部分である。さらにC区の西側半分と、B区の東側半分も同様に擾乱によって遺構面はすべて失われている。D区については、擾乱部分ではないが、遺構は確認されていない。したがつて遺構の検出された部分は、A、B、C、E、F、H、I、J、K、L区の大半とD、G区の一部である。

遺物はその詳細については後の章で記述するが、採集地点の表記には、いずれもこ

こに示した区画割によって行った。また遺構内部からの遺物については、遺構番号を表記しておりこの区画番号は表記していない。

さて今回の調査で確認された遺構と、その量は、次のとくである。

すなわち溝…7、井戸…1、不明土坑およびピットは合計38を数えた。とくに目立った遺構である溝は、一部を除いてほぼ平行に流れしており、その状況から自然の排水溝の可能性も濃いものと考えられる。また不明ピットとしたものには、相互の関連が把握できないものを含んでいる。なおこれらの中には炉跡と見られる火の使用痕跡の明らかなものや(SX16)、木質の痕跡が残されていたピット(SX36)などが含まれている。

2. 層位関係

調査対象となった地域については既に述べたように、相当な積み上が見られる。このため当初の耕作面とは大きくかけ離れている部分が多い。トレンチの各セクションでの観察は、その状況を正確に反映している。以下に各セクションの観察の記録を示し、当該地域の遺構面の堆積関係についてみることにする。

- 南側側壁セクションの観察 -

全体を通じていえるのは、かつての耕作面がほぼ標高25.8m前後に求められるということである。現在の地表面から40~70cmは当該地の整地段階で搬入された堆積土である。第2層から4層前後についても同様に整地に伴う二次堆積を見るのが妥当であろう。これらの上は、ほとんどが砂質の上砂であることが分かる。

次に第5層以下の旧地表面以下について見ると、先ず5層は、10cm前後をはかり、10YR5/1 褐灰色または2.5Y4/4 オリーブ褐色の砂質土である。これらはいわゆる耕作上あるいは表土と見て良いものである。次の第6、7層には 2.5YR4/2 やや砂質土は、比較的厚みを持ち、10~18cm前後をはかる。この層は、耕作に供された部分と見て良く、遺物がもっと多く含まれている部分でもあった。さらにこれらの層と上下する10YR6/6 明黄褐色粘質土は、耕作土の可能性はほとんどないが、一方地山でもない。すなわち当該層は、10cm前後とやや厚いが、ほかの地点、とりわけ水田耕作の行われている場合に見られる保水のための床上と見てよいと考えられる。なお遺構面は、当該床土下層、あるいは先の耕作上下層面から確認されている。

地山に相当する部分は、2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土層であるが、その厚さは20cm前後と比較的薄いものである。

-北側セクションの観察-

全般的に擾乱が著しく、先の南側セクションでみたような堆積状態を観察できる部分は東西の端に近い部分の各々2m弱の範囲である。このセクションでは擾乱層は2~1.2m前後となりそれらの部分では全く旧状を観察することは出来ない。

なおここでは包含層は2.5Y4/2 暗灰黄色や砂質土および2.5Y5/4 黄褐色粘質土から構成されている。この状況は北側とほぼ同じであり、当該遺構面全体が近似する堆積順位によっていることがわかる。

-西側セクションの観察-

比較的擾乱が少ないセクションである。特に擾乱が著しいという部分は見られず、旧表上面は標高2.6.0m前後に求められる。旧表上面から上層にも3~5層の堆積土が見られるが、このような状況は北側セクションでわずかに見られたに過ぎない。これらは当該地の造成時の堆積状況を示すものであるが、とくに遺構との関係は見られないものである。

-東側セクションの観察-

道路側のセクションである。先に見た南側セクションよりも擾乱部分が著しい箇所もある。しかし大勢としては、既に見た各セクションの堆積状況と一致している。中央部から北と南におのおの約2m前後の堆積層の残存状態を見ることができる。堆積層の色調などにわずかな差異を認める部分もあるが、順序などには変化がない。

3. 遺構各説

A、建物跡

SB01建物-E、F、J区で検出されているピットを相互に関連づけると成立する建物遺構である。主軸方向はN-63°-E、残存長(南北)4.86m、(東西)4.64m、柱の径5.6cm、柱の間隔は2.1mをそれぞれかる。検出部分から2間×2間以上の建物の可能性が濃いと考えられる。いずれも建物の端が調査対象外に入っているため、これ以上の証索が困難である。

なお当該遺構を構成するピットは、SX13、22、35である。

B、溝

SD 01溝—全長16m、最大幅0.97m、深さ0.2mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-40°-Eで、その幅は55~97cmと、必ずしも一定していない。地域的には、D区から南西にC、G、F、J、Iの各区を通っている。その中央部からやや西、F区で設定したセクションによると内部の堆積状況は、2.5Y4/6オーラブ褐色粘質土と2.5Y5/1黄灰色粘質土の2層から構成されていることが分かる。中央の攪乱部分のためその痕跡が見られなくなる部分もあるが、その延長上にはおのの同規模の溝造構が確認されていることから、これらは一連の溝であることがわかる。また造物はC、G区に集中して見られたが、そのほかJ、I区などでも多数採集されている。遺物の種類は、大半が須恵器であり、一部に土師器などの器種を含んでいる。またそれらの大半は、流入遺物と見られるもので、遺構面に密着して確認されたものはほとんどない。わずかに図示したものは、まとまって検出されたものである。なお底面の傾斜の角度から見るかぎり、内部の水は北東から南西方向へと流れていたものと考えられる。なお出土遺物から当該遺構の存続年代を推定するならば、ほぼ6世紀から13世紀頃と考えられる。

SD 02溝—全長11.6m、最大幅0.44m、深さ0.2mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-68°-Eで、その幅は22~44cmと、ほぼ一定している。地域的には、H区から南西にJ区に至っている。中央部のF区ではすべて攪乱の中に含まれており、なんら痕跡は確認されていない。J区では、SD 01溝と合流してその延長は確認できない。さらに中央部でSD 03と交差している。この部分での観察では、SD 03溝を当該SD 02溝が切っている様子が良好に観察できる。すなわちSD 03溝は、SD 02溝に先行することが分かる。さらにSD 01溝との関係は必ずしも明らかにはなっていないが、少なくとも内部の埋蔵土の状況などから、SD 01溝がSD 02溝より先に存在したことは確実と見て良いだろう。中央部に設定したセクションによって、その断面を観察すると5Y5/1灰色やや砂質土層の堆積が見られるに過ぎない。J区から土師器鍋などの遺物が採集されている。時期的には古墳時代頃と考えて大過ないだろう。

SD 03溝—全長4.48m、最大幅0.4m、深さ0.08mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-18°-Wで、その幅は27~40cmと、ほぼ一定してい

る。地域的には、F区から東南にJ区に至っている。J区では、SD02溝と合流している。その端は、合流点からまもなく自然消滅している。またF区ではSD01溝と交差している。これらの交差の状況から、SD01溝、SD02溝のいずれも、ともに当該遺構より後出段階のものであることが分かった。

SD04—全長9.2m、最大幅1.52m、深さ0.3mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-32°-Eで、その幅は106~152cmと、一定していない。地域的には、B区からF、E区を通って西南にI区に至っている。B区では、SD08溝と合流している。北端は、建物による擾乱で失われており、確認できなかった。さらに南端は、調査範囲から外に出ており、これも確認は出来なかった。これらの状況はSD01溝とほぼ同じであり、当該丘陵部分の主要な排水溝の一つであったのかもしれない。なおSD08溝は、当該溝に合流してから自然消滅している。すなわち当該溝に流入する溝の一つと見て良いだろう。中央部分のE区、F区には小石をはじめ須恵器などの遺物が集中して認められた。これらの石が周辺の遺構といかに関連するのかは不明であるが、当該溝周辺に集中するピットとともに注目されるものである。内部からの遺物には須恵器、土師器などがあり時期は、SD01と近似する。古墳時代から中世段階のものと見られる。

SD05溝—SD04溝の北西約1mに位置する全長4.46m、最大幅0.38m、深さ0.03mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-32°-Eで、その幅は22~38cmと、ほぼ一定している。地域的には、B区からA区を通って西南にE区に至っている。とくに切り合い関係を持つ遺構は見られない。西南端ではピットに合流する。内部からの遺物は少なく、須恵器などを認めるのみである。古墳時代ころのものと見られる。

SD06溝—調査区域の東側中央部のH区に位置する、全長1.23m、最大幅0.39m、深さ0.08mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-65°-Eで、その幅は0.26~0.39cmと、ほぼ一定している。東西の端を擾乱によって失っており、その全長規模は不明とせざるをえない。なお南に平行するSD07溝とは、何らかの関連を持つ可能性がある。

SD07溝—SD06の南50cmに位置する、全長2.04m、最大幅0.75m、深さ0.28mをはかる素掘りの溝である。主軸方向は、N-60°-Eで、ほぼ検

出部分のみでは梢円形を呈している。あるいは溝以外の遺構、土壌の可能性が濃いものと考えられる。とくに当該遺構の上面に近い部分から須恵器の杯身の完形品が検出されており、それを副葬品と解釈すると、先の土壌とする考えが強く浮上する。時期はその須恵器から7世紀後半頃と考えられる。

C、井戸跡

S E 0 1 - 調査地域の北西隅で検出された径 1 0 0 cm、深さ 4 7 cm をはかる円形に近いピットである。一般的なピットとするにはやや規模が大きく、ここでは井戸の可能性が濃いものと考えた。上面からの遺物の検出は見られたが、内部からはきわめて少なかった。また完全に掘り上がった状況での湧水点は、底部からやや上面に求められた。すなわち現状でも当該井戸は湧水を貯水することが可能であることを示している。しかし調査期間が降雨の多い調査期間であったことを考慮に入れるとその観察が当たっているかどうかは問題が残る。

D、土坑など

S X 0 9 遺構 - K区で検出された土坑である。その北部を攢乱によってわずかに削平されていたが、ほぼ良好な状況で確認された。全長 1 5 9 cm (南北) 1 5 2 cm (東西)、深さ 2 0 cm をはかる方形に近い梢円形を呈する。内部からは多数の須恵器の破片が検出された。土坑の用途は不明であるが、S D 0 7 溝とは異なり、いずれも遺物が破片であり、埋葬遺構となる可能性はないと考えている。あるいはこれら須恵器などの捨て場の可能性が現状ではもっとも妥当かもしれない。

S X 1 6 遺構 - F区で検出された跡である。一辺 7 9 cm のほぼ正方形を呈するもので、周囲には 2 ~ 3 cm の赤変した帯がめぐっている。内部はわずかに灰が堆積しているが、その熱の範囲は余り深くまでは及んでいない。住居跡に伴って設置されている場合が、通例の遺構であるが、当該以降の周囲にはわずかにピットが確認されているのみで住居跡とまでは問題が残る。しかしさすでに削平されているということを考慮すれば、その可能性は十分ある。

そのほかの遺構 - ここに示した以外に、多数のピットが検出されている。これらはB区、F区、J区、K区、E区、I区に集中している。すなわち調査区域の西側あるいは南側に該当する。今回の調査では残念ながら、まとまった建物などの遺構の確認がなかったが、例えば S X 3 6 ピットでは内部から柱痕が確認されており、住居の可能

性が濃いと考えられる。またすでに記述したが、SB 01についても現状では、1棟ではあるが、可能性としては西側に数棟の建物が存在する可能性も残されている。この場合には、現在関連不明のまま残されているピットが重要な役割を果たすのである。

4. 小 結

以上、今回の調査で検出した遺構について記述してきた。これらから調査対象とした部分が、集落あるいは人の居住地域にかなり近い部分であったことが分かる。とくに炉の確認や建物跡あるいは柱痕跡の検出はその推定を肯定する材料である。一方、これらの遺構主要部分の大半が調査範囲外に求められるというのも皮肉といえば皮肉である。後にも記述するが、遺物に摩耗の痕跡が著しいことが特徴の一つとして挙げられる。それはあきらかに流されてきた結果生じた痕跡である。とするとこれらの遺物の本来使用されていた地域は、さらに当該遺跡よりさらに標高での高所に所在していたということになる。その遺跡がどこであるのかは今後の調査の結果に委ねる事とせざるをえないが、少なくとも今回の調査結果から当該地域には複数の集落遺跡の存在が推定されることになった。

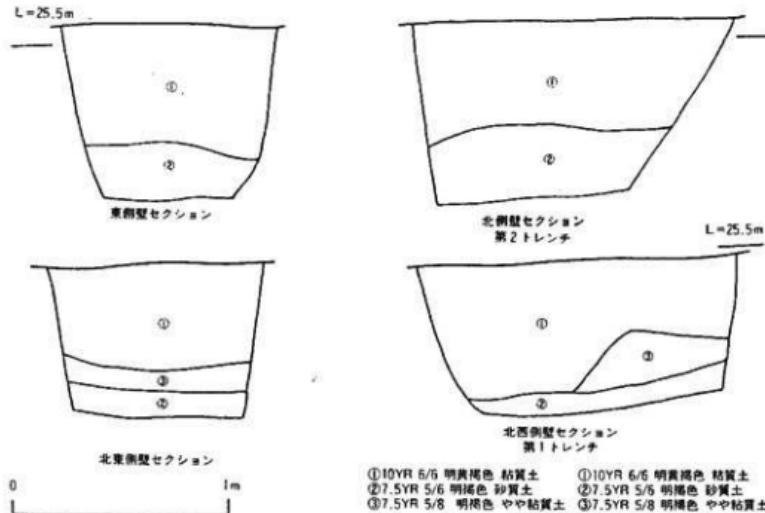


図3 深掘りトレンチ実測図

第4章 出土遺物

1. 概 観

今回の発掘調査の対象面積は、約 120m^2 と近年の市街地での調査としては、やや狭い部類に属する。とくに再開発に伴う遺跡の調査では、従来の建物によってたいてい場合、かなりの範囲まで、深く擾乱されているのが通例で、予想以上の成果を上げることは困難であるともいえる。

今回の調査対象地域についても、当初はかなりの擾乱を予想して調査に着手せざるをえなかったが、予想外に擾乱が少ない範囲であったことは、調査関係者を少なからず驚かせるものであった。既に遺構については記述を行ってきたので、それらの状況についての大半は理解されたことと思う。これら遺構に伴って多数の遺物も検出されている。また遺構内部からは検出されなかったが、その周辺からのもの、あるいは包含層からのものなど出土地点や層についてみて多種多様なものがある。

さらに遺物の種類についても、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦などが見られる。これらのうちもっとも多いものは須恵器であるが、大半のものが破片となっているものであり、完全な形状を残すもの、あるいは完全な形に復元が可能なものは極めて少ない。同時にこれらの破片の大半が断面が丸く摩耗しているものである。これは当該遺物が流入品であることを示しており、あるいは当該地域での生活がなかったのではないかという推測さえ生じかけたものであった。とりわけ溝の検出は、当該地域が水の通路になっていたことを示しており、それにこれらの遺物は呼応するものであると考えられた。

しかしこれながらも、完全な形状のものも含まれていることは、当該遺跡地域で少なくとも、これらの遺物を用いていた人物あるいは人々の生活痕跡がみられるということであり、今回の調査では残念ながら、明らかな遺構の確認ができなかったが、これらの遺物の検出によって、その推定がより強固なものとなり、今後の調査に期待が寄せられることとなった。

さらに遺物の種類について記述すれば、時期的に古墳時代、奈良時代、平安時代、中世（鎌倉時代以降）のものが混在している。遺構との関連では、先に紹介したが、

それら以外にも各時代のものが、各所から採集されている。なお量は、すべての破片を合計すると1088点となる。これらのうち図化可能なものについてはすべて図化した。須恵器の破片については大きな破片については大半図化したが、細かなものについては省略した。しかし図化を省略したものについても、いずれも詳細な観察を行い、珍しい叩きなど特殊なものについては、その大きさに係わらず図化したものがある。なお検出地点および造構、量については表1を参照されたい。

	須恵器	土師器	土師質土器	陶器	瓦器	青磁	瓦
SD01	57	52			2	2	3
SD02	8	63					
SD03	6	14					
SD04	92	28	9	2	2		
SD05	12	11					2
SD07	16	15					
SD08	1	1					
SX01	6	8					
SX02	4	4					
SX03		1					
SX08	1	1					
SX09	14	39					
SX12	1						
SX14	1						
SX15	7	8					
SX16	4	10					
SX21		2					
SX22	2						
SX27	2						
SX32	1	1					
SX34		4					
SE01	14	19			1		
A区	17	13					
B区	21	13					
C区	59	10					
D区	33	8					
E区	67	35					
F区	39	19					
G区	3	2					
H区	1						
I区	6	4					
J区	44						
K区	16	11					
L区	4	1					
東側セクション	9	3					
西側セクション	54	20					
南側セクション	4	5					
北側セクション	9					1	2
合計	635	425	9	2	5	4	8

表1 各地区、造構別遺物出土状況

2. 遺物各説

A、土師器

杯：底部のみの遺存である。断面三角形の外反する高台を両端に貼付する。高台の直径は9.1cm、残存高は1.7cmをはかる。須恵器模倣の杯と考えられる。(301-C区出土)

甕：図化可能なものは4点である。口径12.9、残存高6.0cm(302-SD02出土)、口径14.2、残存高4.0cm(303-SD02出土)、口径18.3、残存高4.6cm(304-SX09出土)、口径20.3、残存高5.1cm(305-SD02出土)の4点である。302は、大きく「く」の字に曲げており、端部は丸く仕上げている。内部はオサエの痕跡が残されているが、外面は摩耗が著しく観察不能である。303は、内外面ともに回転を用いたナデ調整によっており、刷毛目などは観察できない。304は、比較的良好な遺存状態を示しているが、破片のため十分な観察ができない。口径部内面には刷毛目調整が横方向に、体部には縦方向に各々認められる。305は、もっとも大型のもので、内面はオサエ、外面には縦方向の刷毛目調整が認められる。

鍋：口径22、残存高6.3cmをはかる鍋である。両端には上方向きの把手を伴っている。内外ともに回転ナデ調整によって仕上げられている。(306-SD02出土)

B、須恵器

杯A：口径11.5、残存高2.1cmをはかるたちあがりを有する杯の身である。破片となっており、当該地域での生活に供されたものか流入品かは不明である。たちあがりは短く内傾しており、当該たちあがりを認める最新の器種と見ることができる。陶邑編年II形式6段階に相当する。(1-E区出土)

杯B：口縁部を欠損したものが大半で、いずれも高台部分のみが残っている。一方口縁部のみの遺存も見られるが、いずれも相互の関連は不明である。高台を伴う器種は、ほぼ口径の差は見られるがその形状や貼付されている位置など近似するものである。(21、23、27-SD04出土)なお一例のみ形状、位置とともに異なるものがあり、時期的に後出のものと見られる。(25-F区出土)なお前者は陶邑編年III型式2～3段階頃、後者はIV型式の段階と考えられる。

杯C：底部のみの遺存である。ロクロからの切り放しの糸切り手法がそのまま残っている。（31-D区出土）

蓋A：天井部中央を失った蓋である。内面にはかえりを伴う特徴的な段階のものである。陶邑編年Ⅲ型式2～3段階に相当する。（9-F区、10-SD04、11-表面採集）

蓋B：天井部中央部分のつまみの遺存部と当該部分を失ったものとである。端部の曲がり具合などの形状から陶邑編年IV型式2段階までに相当するもの（14-C区、15-SX09、17-SD03出土）とやや新しい3～4段階に相当するもの（16-J区出土）が見られる。なおつまみについてはいずれに分類しても問題のないものではあろうが、ここではその結論は示さないでおくこととする。

皿・杯：口径11.9、器高3.3cmをはかるものと（18-SD02出土）、口径12.2、器高3.7cmをはかるもの（19-SD07出土）がある。両者ともに図面上ではほぼ完全な形状に復元されているが、前者は破片である。前者が後者よりやや時期的に新しいと考えられる。ちなみに陶邑編年ではIV型式に相当し、後者はあるいはⅢ型式に含まれるかもしれない。また口縁部を失った破片も見られるが、ほぼ前者の時期とみてよいだろう。（20-SX16、22-F区出土）

鉢：底部の破片である。口縁部の状況などは不明である。やや焼成も甘く軟質もある。（28、29-SD04出土）なお口縁部のみの破片も採集されている。（4-SD02出土）

壺：長頸壺の頸部の破片である。外面中央に沈線を2条巡らせている。上下を欠損のため詳細は不明であるが、比較的大きな器種となると考えられる。（30-SD01出土）このほか壺の体部の破片も出土している。（3-SX09、34-SD04出土）また広口壺の口縁部も見られるが、この器種を壺とする研究者もいる。しかし口縁部が存在することから、壺とするのは妥当ではない。（32-表面採集）

高杯：脚部の破片であり、杯部は欠損。形状から見てⅢ型式のものに相当する。（4-SD04出土）また杯部と見られる破片も出土している。（8-J区出土）

甕：体部の破片である。円孔部分は失っており、わずかに体部最大径の部分のみが残る。陶邑編年Ⅱ型式に相当するものと見られる。（7-SD01出土）

瓶：平瓶あるいは提瓶の口縁部の一部である。下方部分が残されていないので器種

の詳細は不明である。（6-SX09出土）

甕：口縁部と体部の破片ばかりが多く採集されている。これらのうち比較的大きいものについて拓本および図化して観察を行った。口縁部では、端部で肥厚して断面が角張っているもの（35-K区、36-SD02、33-J区、38-C区、41-F区出土）と丸く仕上げているものがある。後者はさらに凸線を口縁部端にめぐらせているものが多い。（37-SD04、39-SX09出土）また口縁部基部の破片も見られる。（40-SD04出土）また外面の文様は38と41に波状文、40に回転カキ目調整が見られるのみであった。

一方、体部の破片には内外ともに叩きあるいは仕上調整の痕跡が見られるのが通例である。大半のものは平行叩き、円弧（50-SD01、53-SD03、54、55、57～60-SD04、63-SX02、68～72）ないし同心円叩きが見られる（43、44、46、47-SD01出土）、という組み合わせである。これに上面を回転カキ目が施される（48、49、56、60～62、64、66）という程度である。なお特筆すべきものとしては、内外ともに平行叩きを認めるもの（67-E区出土）や車輪文を内面叩きに伴うもの（70-A区出土）がある。

これらの破片の大半は、甕の体部の破片と見られ、とくに記述に値するような器種や器形を含んでいないように思われる。なお出土地点別に見るとSD01溝内部がもっとも多く見られる。（43～50）いずれも時期的には接近しており、8世紀前後頃のものと見られる。同じく多いのはSD04溝であるが（54～61）、ここでは古墳時代のものと考えられる6世紀～7世紀のものが集中している。

C、瓦

平瓦：瓦も少量ながら出土している。これらのうちもっとも時期的に遡るのは外面に格子叩きを残すもの（76-SD01出土）である。このほか内面に布目を残すもの（75-表面採集）もあるが、時期的には新しい。前者は、7世紀、後者は9世紀頃と見て大過ないだろう。このほか軒平瓦の破片も見られるが（73-北側セクション出土）時期的には新しく江戸時代以降のものと考えられる。

D、そのほかの遺物

以上のはかには、陶器（401-E区出土）破片や磁器（巻頭カラー図版参照）などが見られる。後者はいずれも中世のものであるが、国産品ではなく中国からの輸入

品と考えられるものである。

3. 小 結

今回の調査で出土した遺物について記述してきた。その多くは溝内部からのものであり、器種的には須恵器がもっとも多いようである。これらから各遺構の年代が推定される。すなわち、これらの主要なものが7世紀半ばから8世紀に集中しているのが注目される。これら遺物から、当該地域の開発が7世紀半ばにはじまり8世紀には、その生活が継続していたと考えられる。しかし平安時代に入ると遺物の量は圧倒的に少くなり、中世の段階には、ほとんどその痕跡も消滅する。すなわちこの時期以降は当該地域の生活が行われなくなり、やがて単なる水田や畠という耕作用地へとなつていったものと考えられる。

付 蛍池東遺跡における花粉分析および プラント・オパール分析

1. 試料と分析方法

螢池東遺跡より採取された7試料のうち花粉分析は6試料について、プラント・オパール分析は3試料について行った。これら花粉分析およびプラント・オパール分析に用いた試料は以下の通りであるが、試料採取地点および詳しい土層記載については遺跡の項を参照して頂きたい。なお括弧内は便宜上つけた試料番号である。

SD 0 1 (0 1) : 灰色砂質シルトで黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉）。

SD 0 2 セクション下層 (0 2 L) : 灰色砂質粘土で黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉、プラント・オパール）。

SD 0 3 (0 3) : 灰色砂質粘土で黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉）。

SD 0 4 上層 (0 4 U) : 灰色砂質シルト（やや粘土質）で黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉）。

SD 0 4 下層 (0 4 L) : 砂レキで、レキの最大径は30mmである。基質は灰色シルトで黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉）。

SE 0 1 底部土砂 (SE) : 砂レキで、レキの最大径は8 mmである。基質は青灰～灰色の粘土～シルトで黄褐色の酸化鉄集積がみられる（花粉、プラント・オパール）。

セクションの地山直上（直上） : 灰色砂質シルト～粘土で黄褐色の酸化鉄集積がみられる（プラント・オパール）。

これらの試料について次のような手順に従って花粉分析およびプラント・オパール分析を行った。

a) 花粉分析

試料（湿重約2～3g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム水溶液を加え20分間湯煎する。水洗後傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液処理（臭化亜鉛溶液、比重2.1を加え遠心分離：750rpm30分）を行い、うわすみ液を回収し水洗する。次に酢酸処理を行い、統いて

アセトトリス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

b) プラント・オパール分析

一定体積の試料を乾燥後秤量する（仮比重測定）。別に試料約1g（秤量）をとり、約0.02gのガラスピーズ（直径約40μm）を加える。次に30%の過酸化水素水を加え、脱有機物処理を行う。これに水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20μm以下の粒子を除去する。この残渣よりオイキット（封入剤）を用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスピーズが300個に達するまで行った。

2. 結 果

a) 花粉分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉10、草本花粉11、形態分類で示したシダ植物胞子2、藻類1の計24である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表2に示した。なお一覧表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、またマメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとあるが、それぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、前試料とも検出花粉量が非常に少なく、SD 0.4下層やSE 0.1底部土砂では全く検出されなかった。検出された樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く、コナラ属コナラ亜属やクリ属シイノキ属—マテバシイ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属がそれぞれに次いでいる。草本花粉ではイネ科が最も多く、SD 0.1では花粉塊もみられる。またこのSD 0.1ではソバ属が3個体検出されている。SD 0.4上層においてアブラナ科が他試料に比べて多くみられる。

b) プラント・オパール分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーズ個数の比率から試料1g中の各プラント・オパール個数を求めた（表3）。またこのプラント・オパール個数と試料の仮比重および換算計数（機動細胞珪酸体1個当りの各植物体乾燥重量）から層厚1cm・10a当りの各植物体量を算出した（表4）。なお換算計数はイネが赤

和名	学名	01	02L	03	04U	05L	SE
樹木							
モミ属	<i>Abies</i>	—	1	—	—	—	—
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	3	—	—	—	—
マツ属(複数商業属)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		1	—		—	—
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	—	1	1	—	—
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	3	1	—	—	—	—
クマシデ属-アサガ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1	—	—	1	—	—
ハンノキ属	<i>Ailanthus</i>	—	—	—	1	—	—
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	—	7	—	4	—	—
コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	5	6	—	2	—	—
クリ属-イノキ属-マチバシイ属	<i>Castanea - Castanopsis - Parania</i>	2	3	—	3	—	—
草本							
イネ科	<i>Gramineae</i>	37	8	3	22	—	—
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2	—	—	—	—	—
サンエクダ属-ウナギッカ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	—	—	—	—	—
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	3	—	—	1	—	—
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	2	—	—	1	—	—
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1	—	—	—	—	—
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	—	1	—	8	—	—
マメ科	<i>Leguminosae</i>	—	1	—	—	—	—
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	—	2	—	1	—	—
他のキク科	other <i>Tubuliflorae</i>	—	1	—	1	—	—
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>	1	—	—	—	—	—
シダ植物							
平条型胞子	<i>Monolet spore</i>	6	7	17	1	—	—
三條型胞子	<i>Trilete spore</i>	2	—	—	—	—	—
黄緑色藻類							
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzinger	4	—	—	—	—	—
樹木花粉	<i>Arboresal pollen</i>	16	22	1	12	0	0
草木花粉	<i>Nonarboresal pollen</i>	47	13	3	34	0	0
シダ植物胞子	Spores	8	7	17	1	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	73	42	21	47	0	0
不明花粉	[†] Unknown pollen	3	7	1	19	0	0

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

表2 萤池東遺跡の産出花粉化石一覧表

螢池東運跡				
試料番号	(イネ (個/g))	(タケ亜科 (個/g))	(ヨシ属 (個/g))	(ウシクサ族 (個/g))
地山直上	1,800	421,500	1,800	2,700
SD 0 2	0	262,600	900	6,100
SE 0 1	0	3,900	0	0

表3 試料1g当りのプラント・オバール細数

螢池東運跡				
試料番号	P.O.数 (個/CC)	稻わら量 (t/10a·cm)(t/10a·cm)	総頭数 (t/10a·cm)(t/10a·cm)	タケ亜科 (個/CC)
地山直上	2.00 3,600	0.69 0.37	1.06 843,000	40,46 3,600
SD 0 2	1.98 -	-	-	2,27 5,400
SE 0 1	2.04 -	-	-	1.12 12,100

表4 各植物の植物体量 (10a当たりの乾燥重量)

[各植物のプラント・オパール(個数)]

[各植物の植物体量]

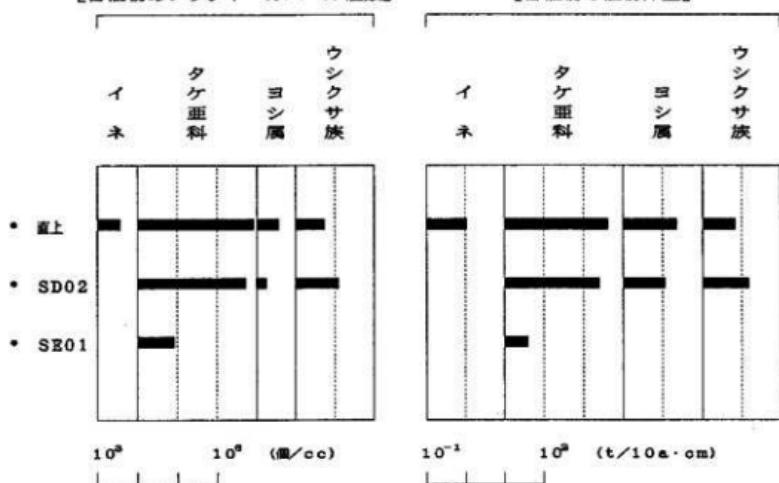


図4 蛍池東遺跡のプラント・オパール分布図

米の2.94（このうち種実重は1.03）、タケ亞科はゴキダケの0.48、ヨシ属はヨスの6.31、ウシクサ族はススキの1.24（杉山・藤原 1987）を用いた。

分析の結果、イネのプラント・オパール地山直上の試料から1g当たり1,800個検出された他はみられなかった。同試料からタケ亞科が試料1g当たり42万個と非常に多く、他にヨシ属やウシクサ族（ススキなど）がみられた。

3. 考 察

以上のような花粉化石およびプラント・オパールの産出傾向から水田耕作等の人間の生業活動について若干の考察を試みた。なお試料としては砂やレキが多く、また花粉粒としては傷んでいるものが多いことなどから、選択的に残されたものが検出されている可能性が高いと思われる。したがって今回の結果では正しく周囲の植生が反映されているとは考え難く、当時の古植生についてのコメントは出来ないと考える。

地山直上において試料1g当たり1,800個のイネのプラント・オパールが検出された。杉山（1989）は、稻作の検証としてイネのプラント・オパールが試料1g当たり5,000個

以上検出された場合その可能性が高いと判断している。これに従えば地山直上の試料採取点において稲作が行われていた可能性は低いと判断されるであろう。また花粉分析結果からも水田雜草として普通にみられる分類群（ミズアオイ属など）が一つも検出されておらず、水田耕作が行われていた可能性は考え難い。以上のことから今回分析を行った地点あるいはその付近において稲作が行われていた可能性は非常に低いと判断される。しかしながら少ないながらもイネのプラント・オパールが検出されており、これは場所の特定は出来ないが、当時どこかで稲作が行われていたことを示していると思われる。

SD 01 の試料からソバ属花粉が 3 個体検出されている。高知平野において行われた調査から中村は、「ソバ花粉が 1 % (マツ属、スギ属花粉の合計に対する百分率) 以上検出されたならば、その地点あるいは余り離れていない地点で、かなり大規模にソバの栽培が行われていたとみなすことが出来よう」と述べている（中村 1984）。この調査例から見ると SD 01 の試料におけるソバ属花粉の検出量としては比較的多く、この試料採取地点付近におけるソバの栽培についてその可能性は高いと考えられよう。

4. ま と め

以上の分析結果ならびにその考察から次のことが予想される。

- 1) 今回分析を行った各地あるいはその周辺における稲作の可能性は非常に低いと判断される。
- 2) SD 01 地点付近におけるソバ栽培の可能性は高いと考えられる。

5. お わ り に

花粉はシルトや粘土粒子と同様な移動・堆積をすることが知られており、よって砂やレキの多い試料には少なくなることが予想される。今回分析に用いられた試料は砂やレキが多く、花粉分析を行う試料としては条件の悪い試料であった。その結果として当遺跡周辺における古植生について言及出来ず、より条件の良い試料（泥炭や有機質土）を用いた分析を待ちたいと考える。

引用文献

- 中村 純（1984）古代農耕とくに稻作の花粉分析学的研究。古文化財の自然科学的研究 古文化財編集委員会編、同朋舎、p.581-602。
- 杉山真二（1989）プラント・オパール。練馬区弁天池低湿地遺跡の調査、東京住宅局・練馬区遺跡調査会、p.133-140。
- 杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。川口市遺跡調査会報告 第10集 赤山 古環境編、埼玉県川口市遺跡調査会、p.281-298。

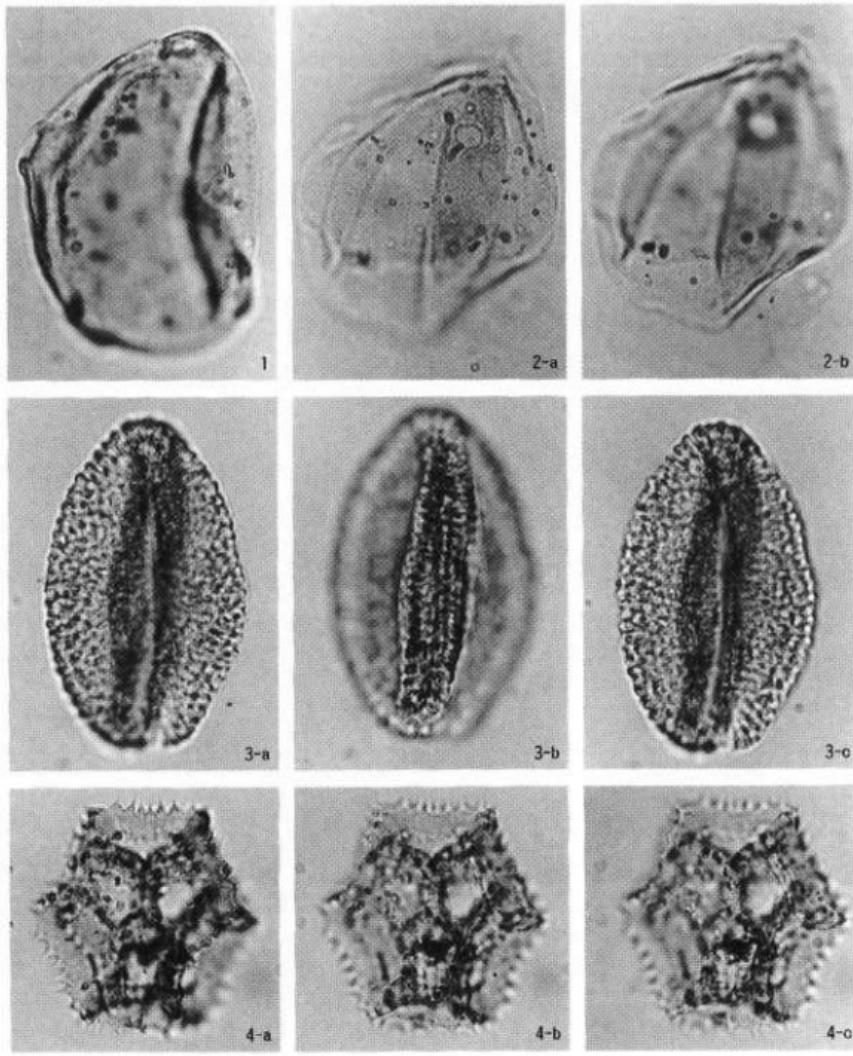


図5 莖池東遺跡の花粉化石

- 1:クマシテ属-アサダ属 SD01
- 2:イネ科 SD01
- 3:ソバ属 SD01
- 4:タンボボ亜科 SD01

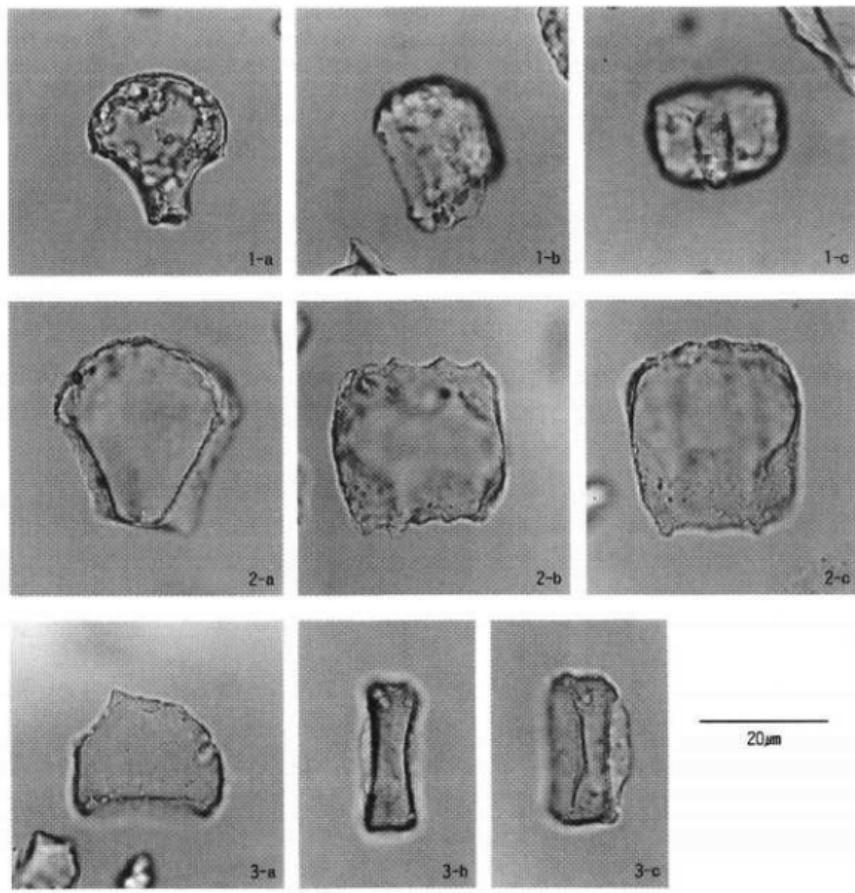
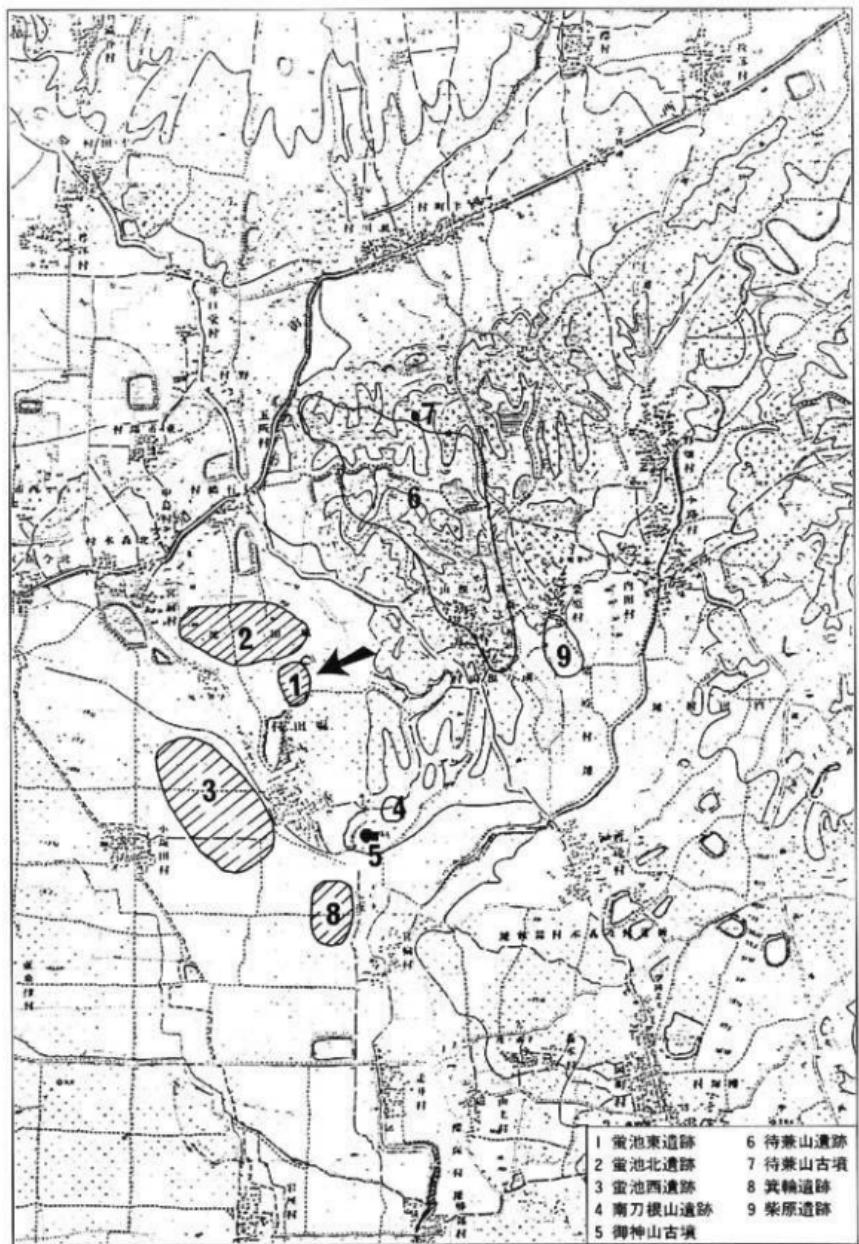
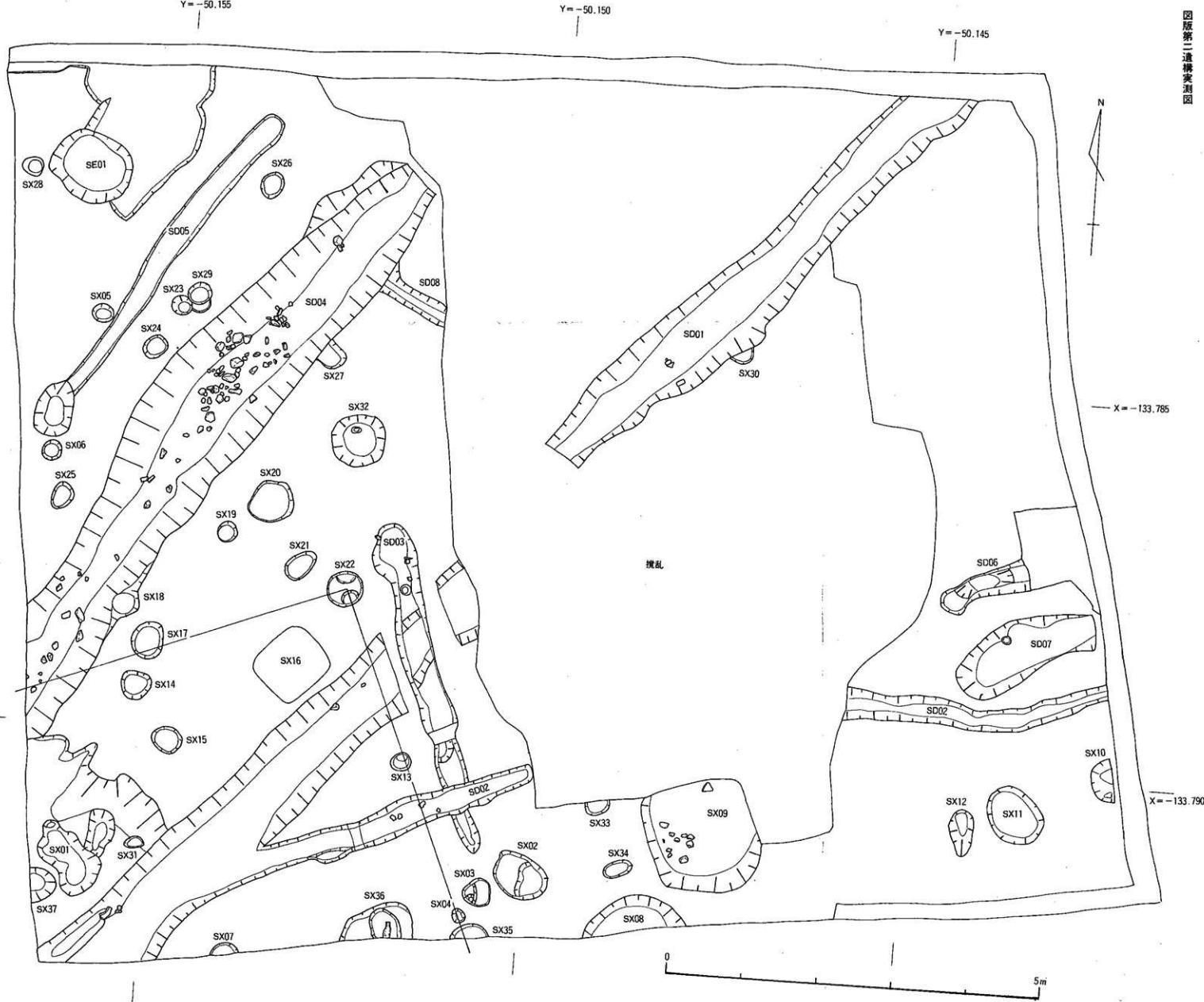


図6 萩池東遺跡のプラント・オバール

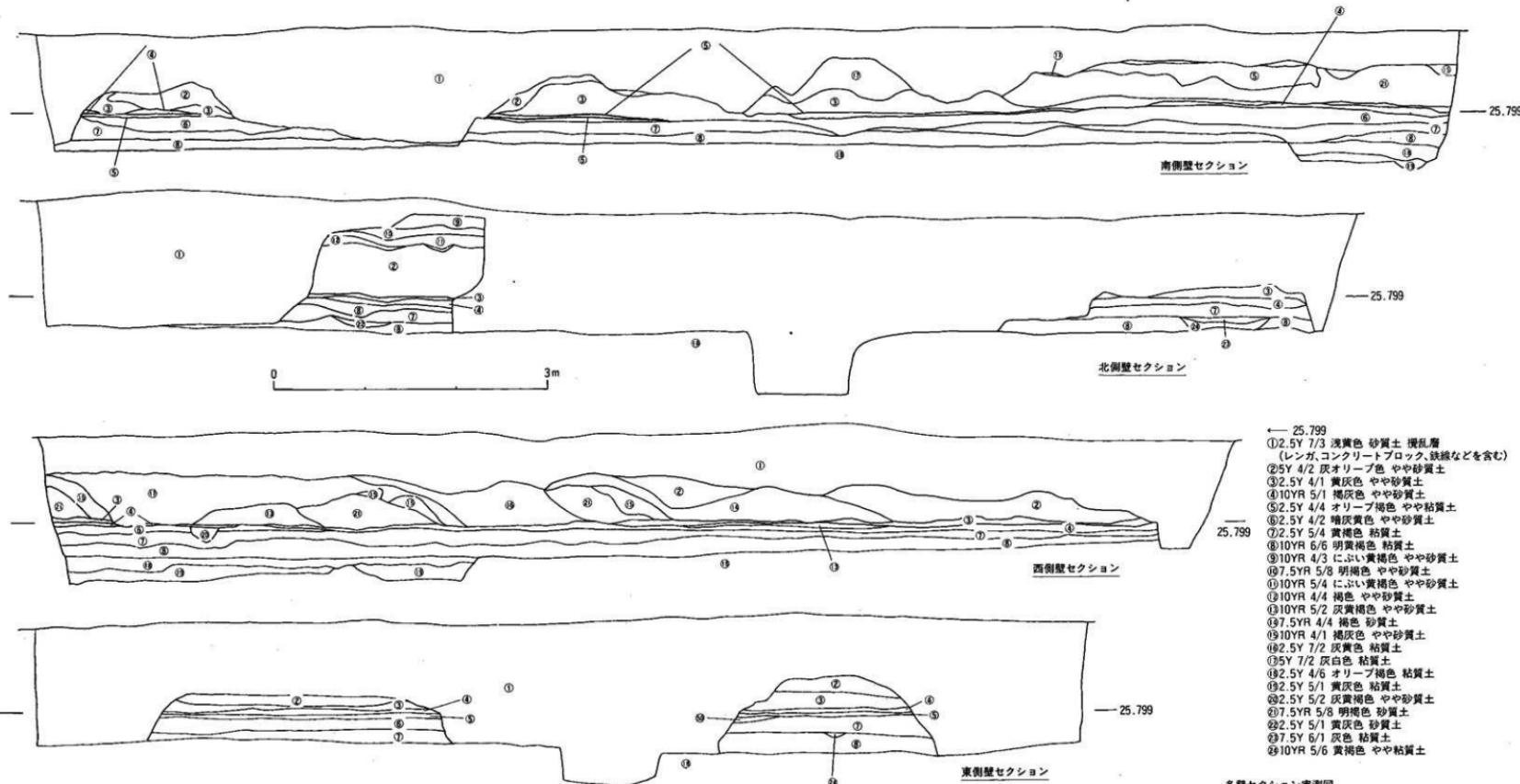
- 1:イネ 地山直上
- 2:タケ亜科 SD02下層
- 3:タケ亜科 SD02下層

図 版



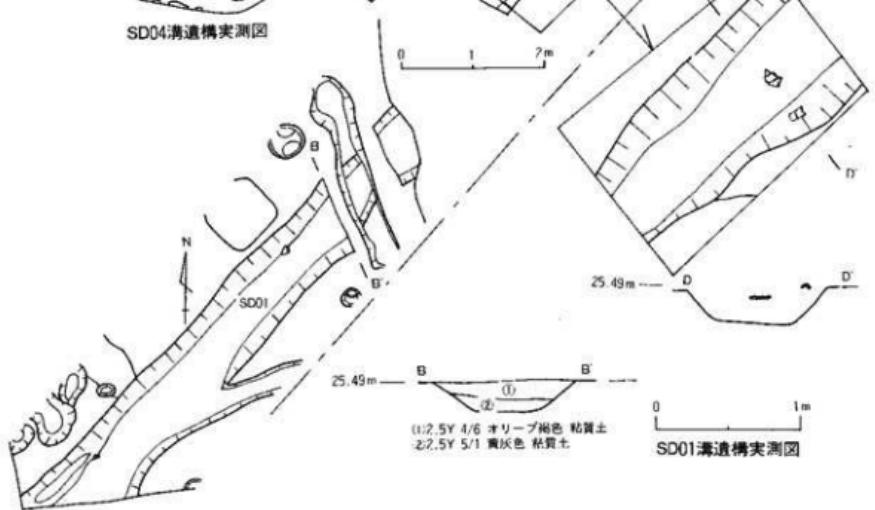
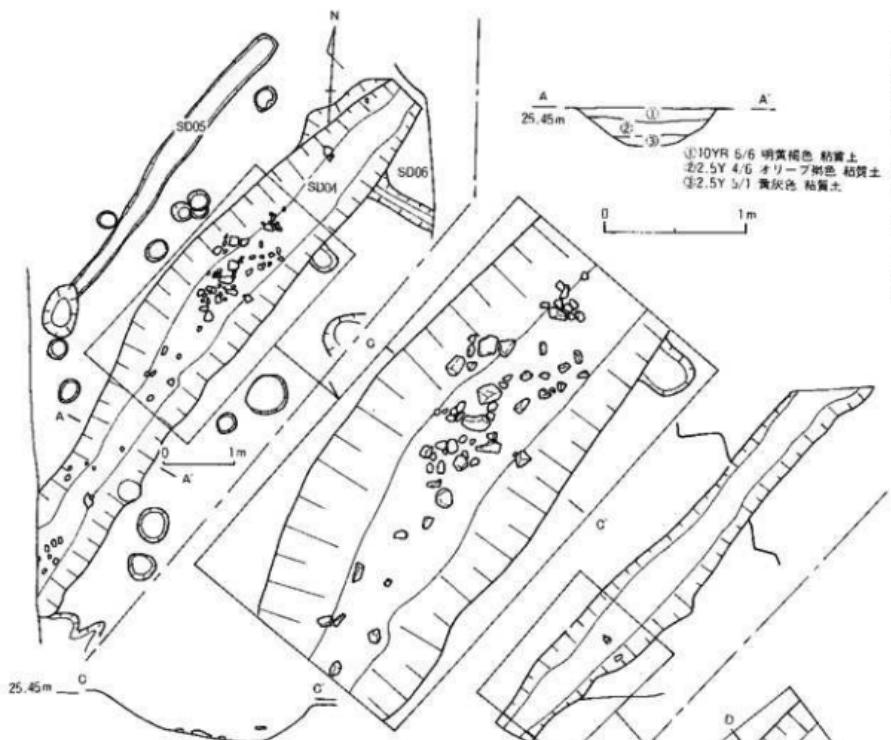


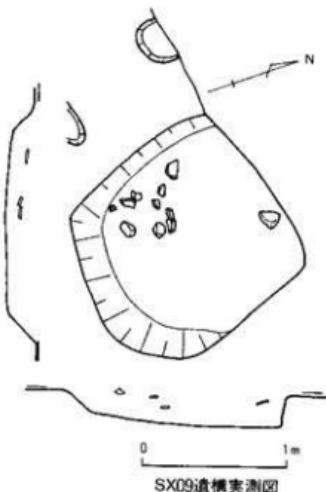
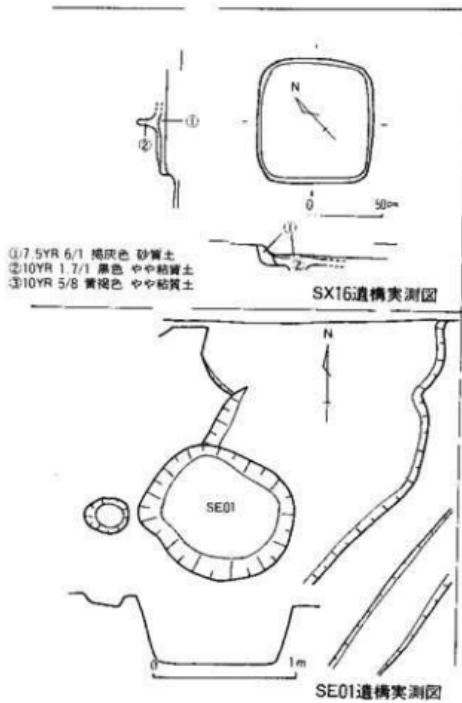
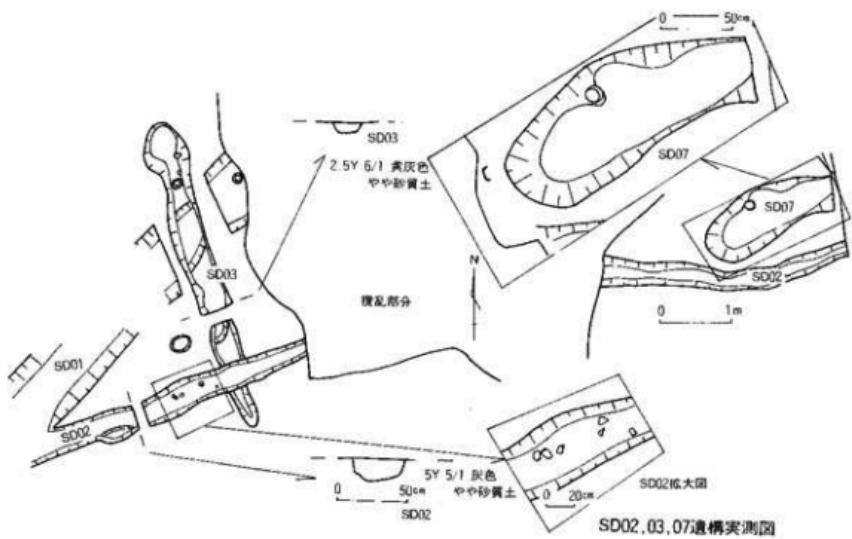
図版第三 遺構実測図

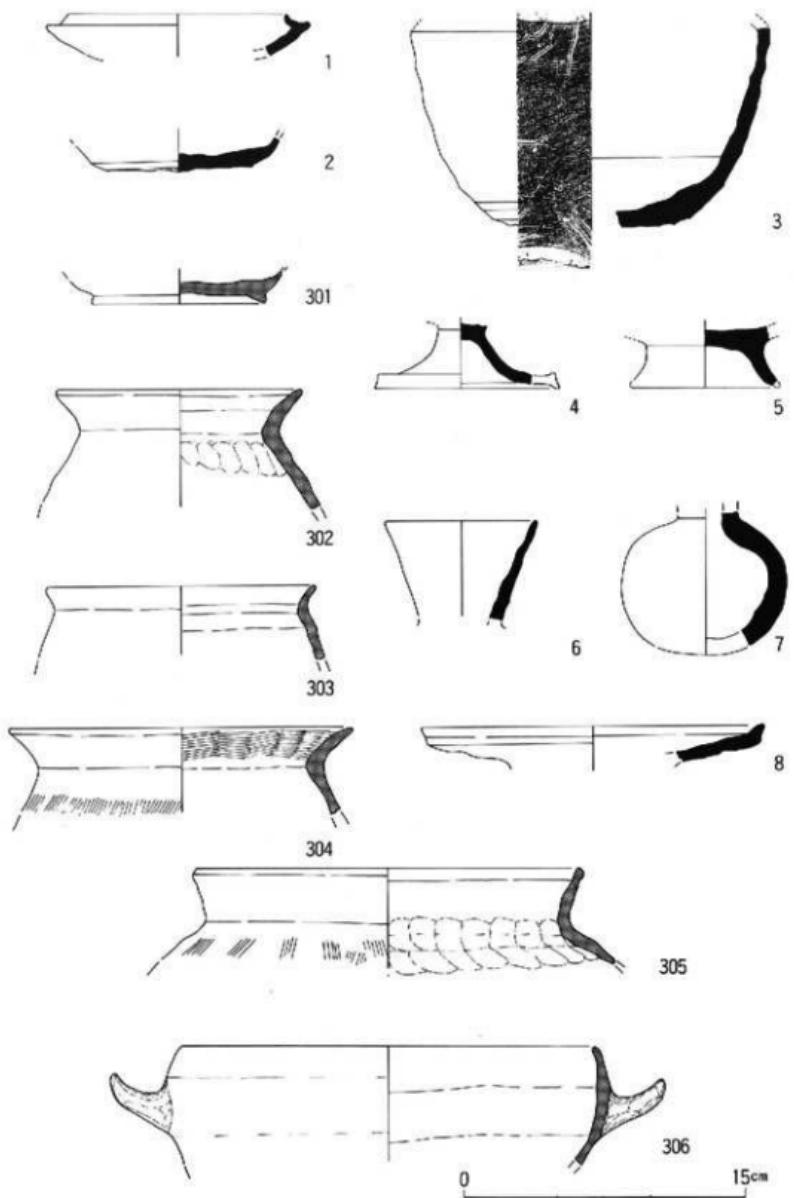


各壁セクション実測図

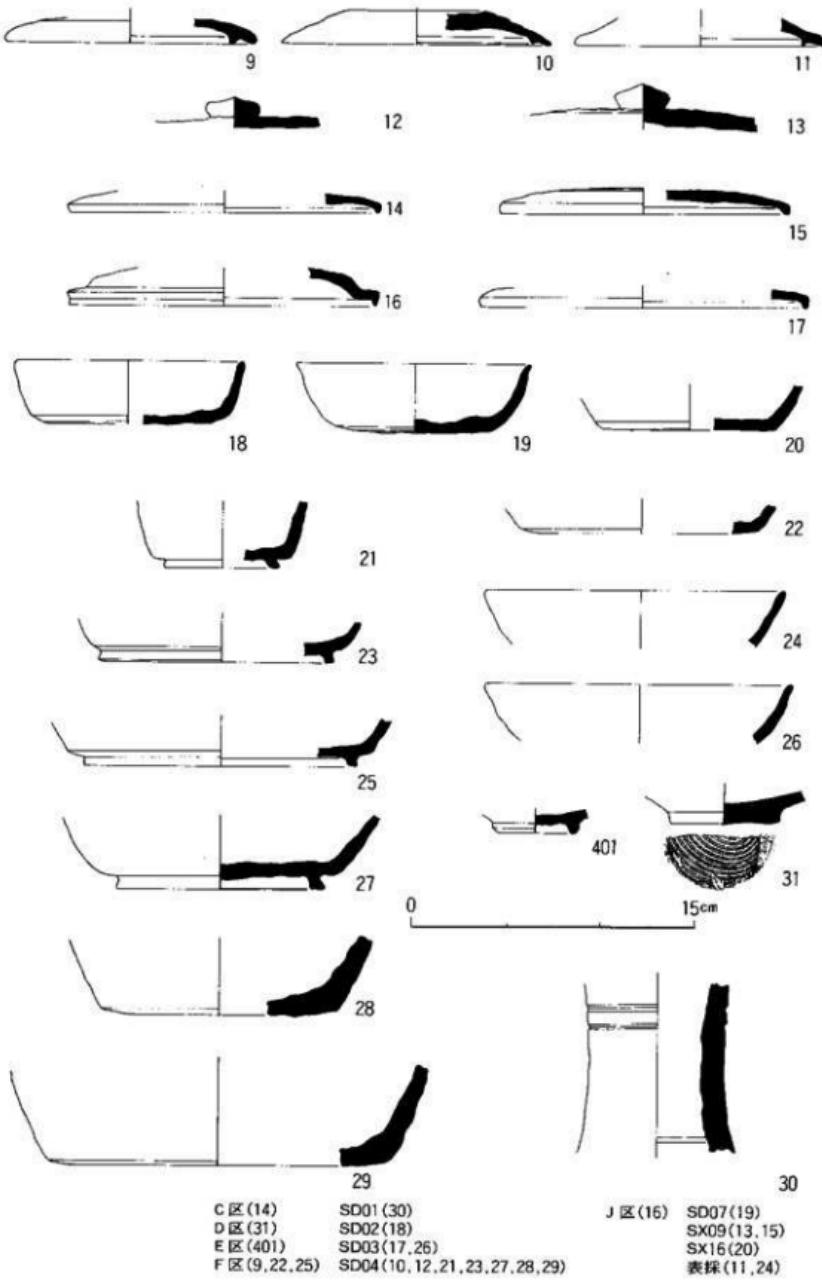
図版第四造構実測図(SD01・04)

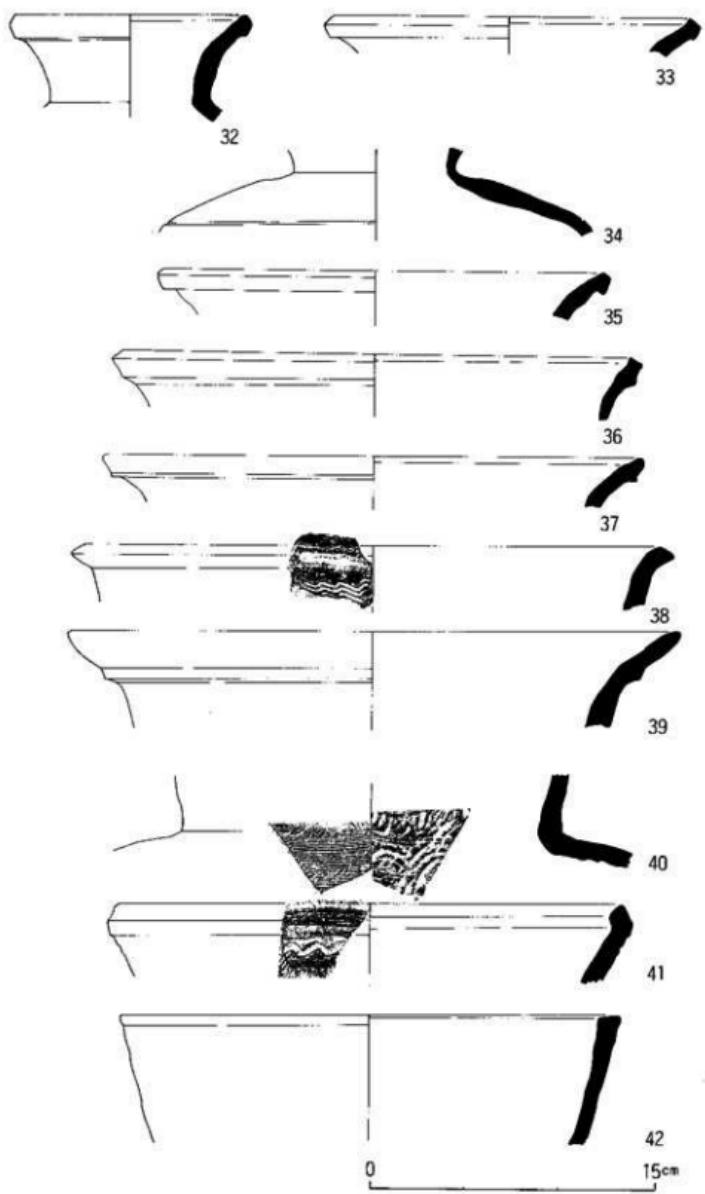




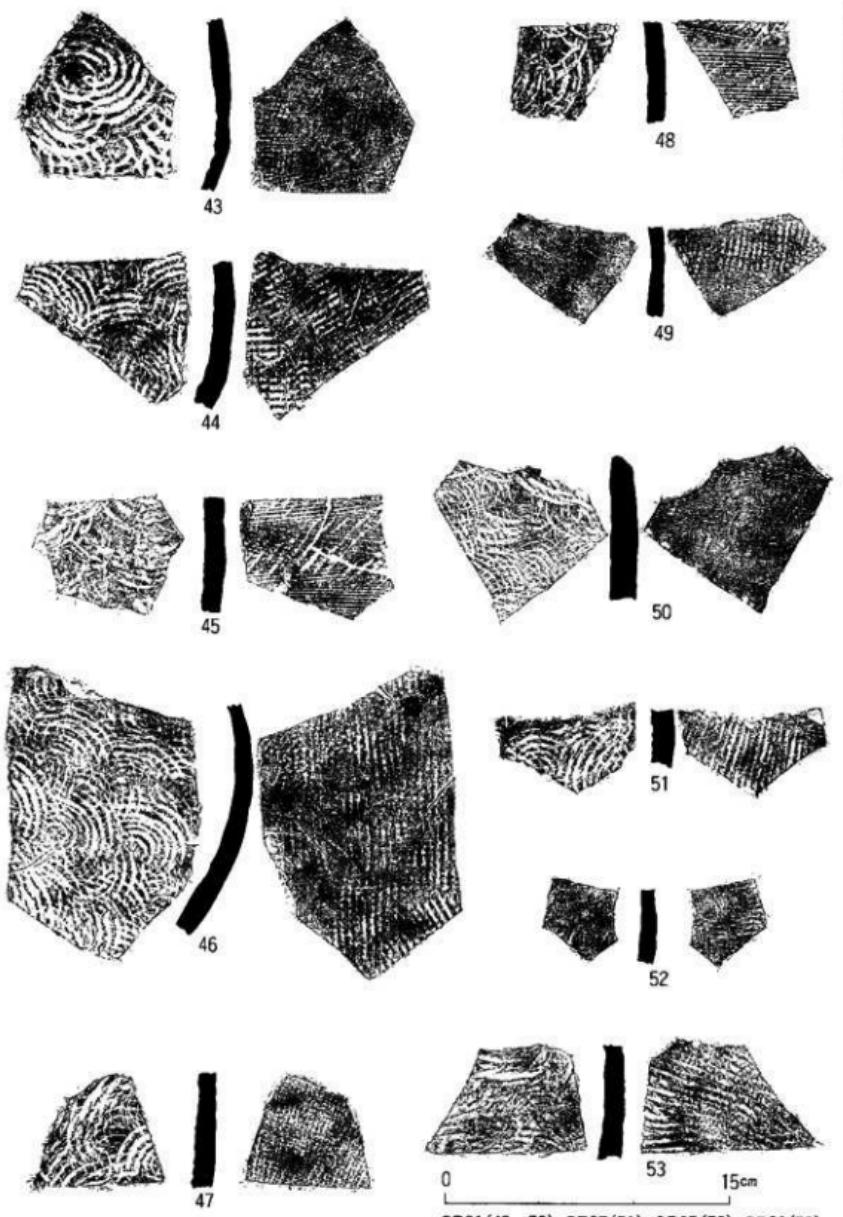


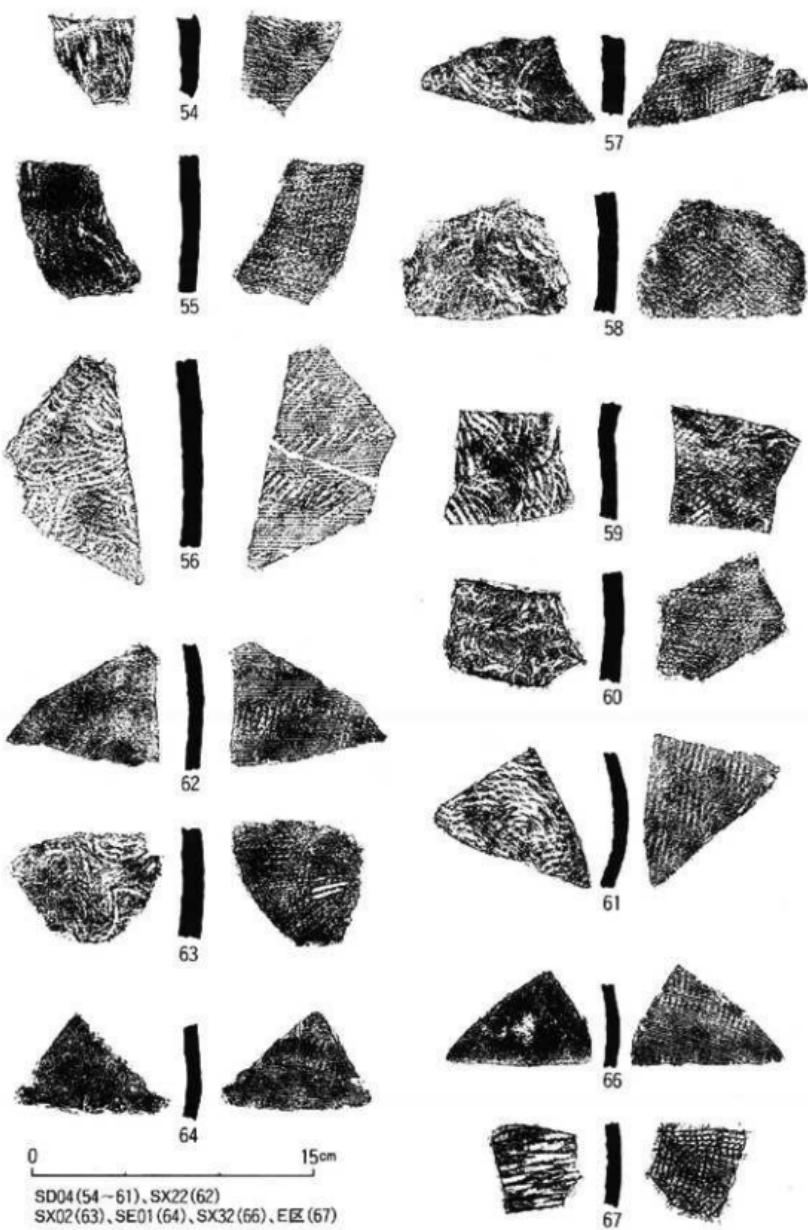
E區(1)、SD02(2,302,303,305,306)、G區(301)、SX09(3,6,304)
SD04(4)、A區(5)、SD01(7)、J區(8)

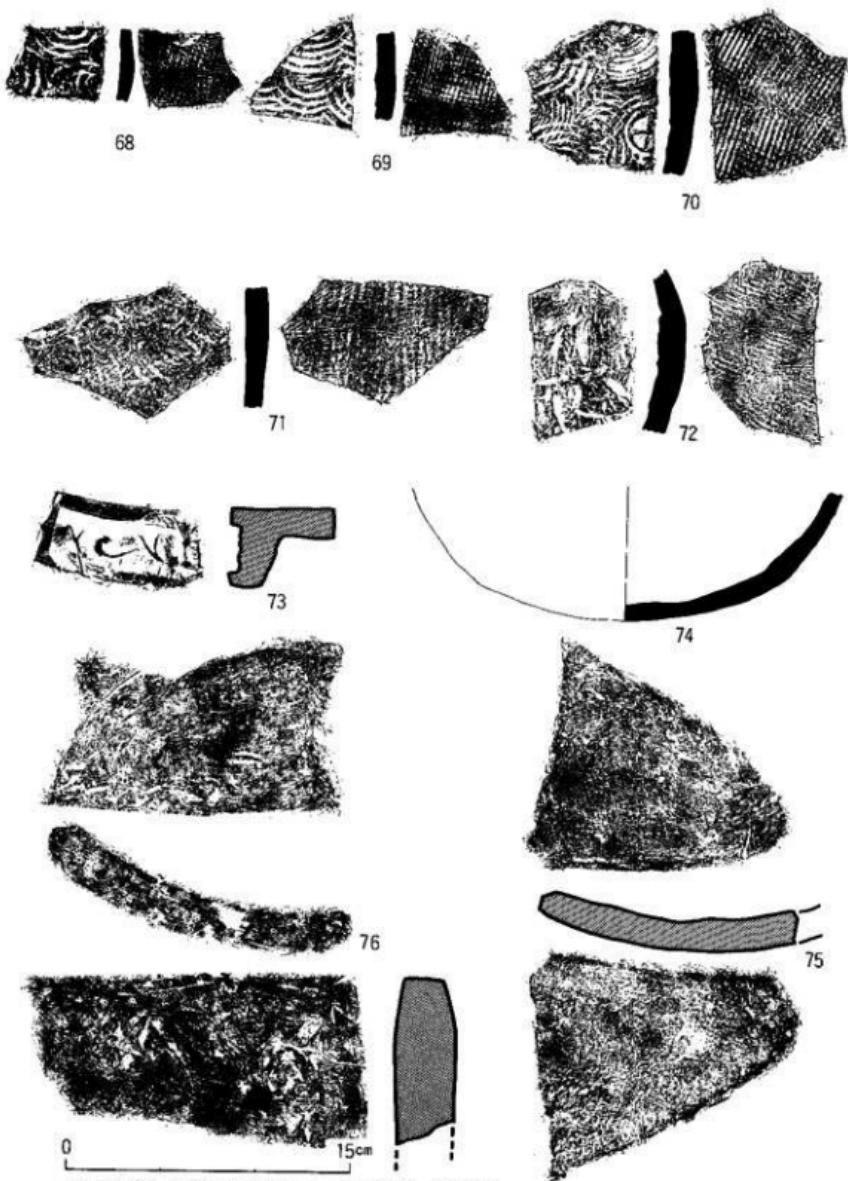




表採(32)、J区(33)、SD04(34, 37, 40)、K区(35)
SD02(36, 42)、C区(38)、SX09(39)、F区(41)







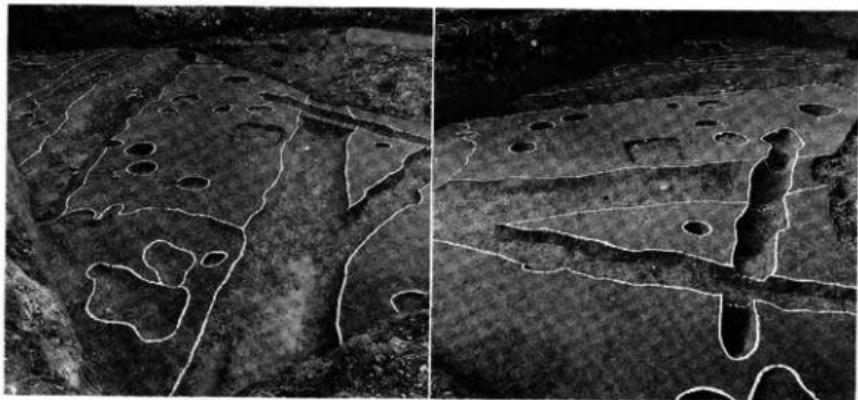
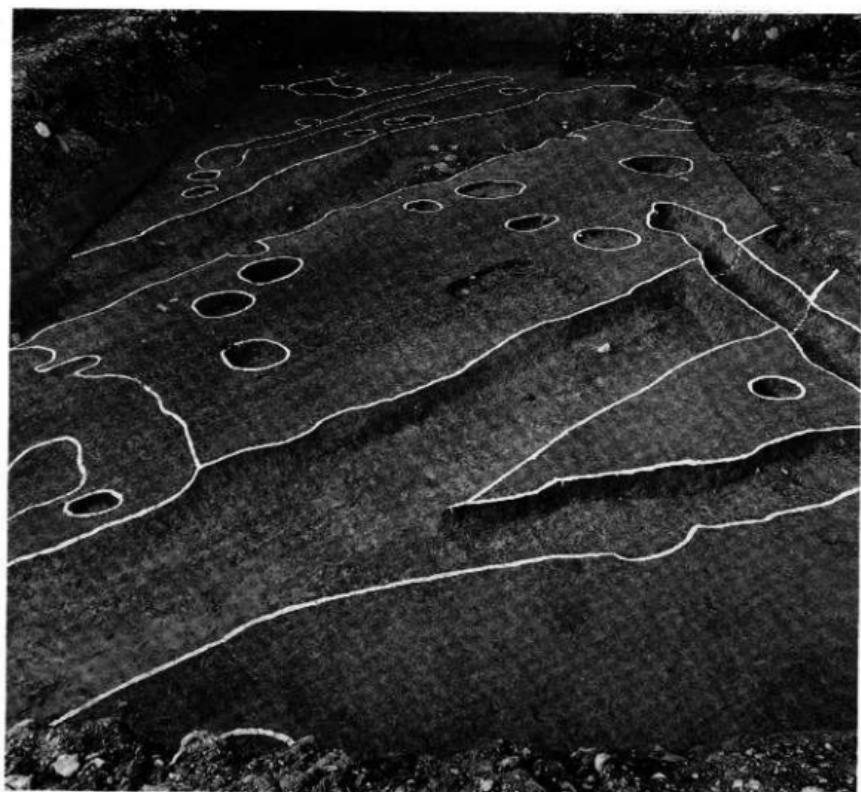
J区(68,69)、A区(70)、北セクション(71,73)、E区(72)
SD03(74)、SD01(76)、表採(75)



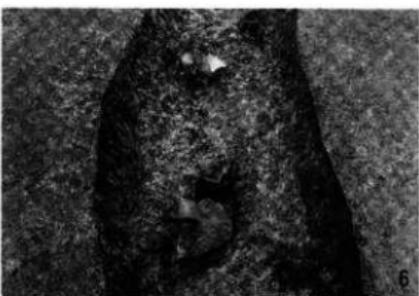
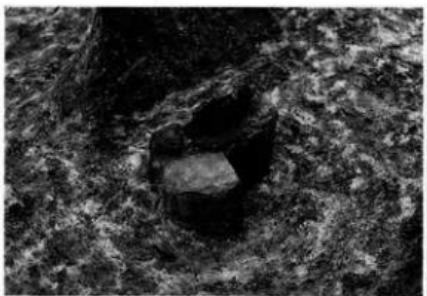
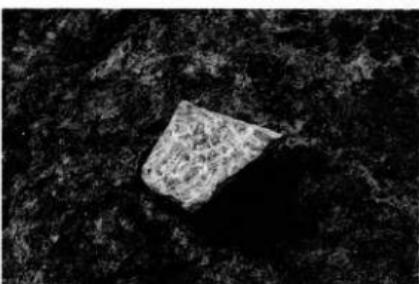
調査地全景（東から）



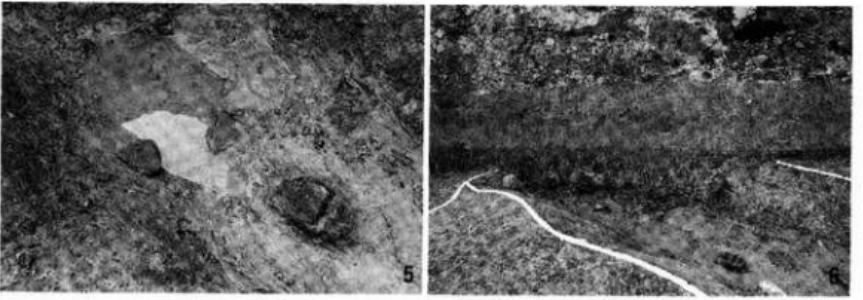
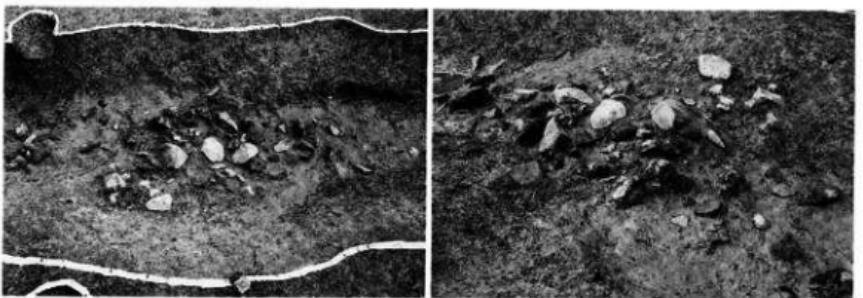
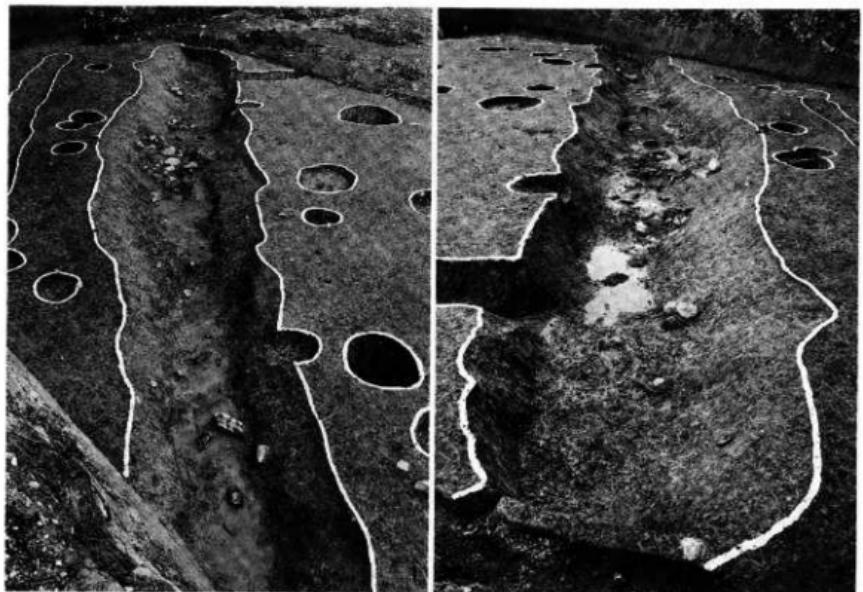
同上（南から）



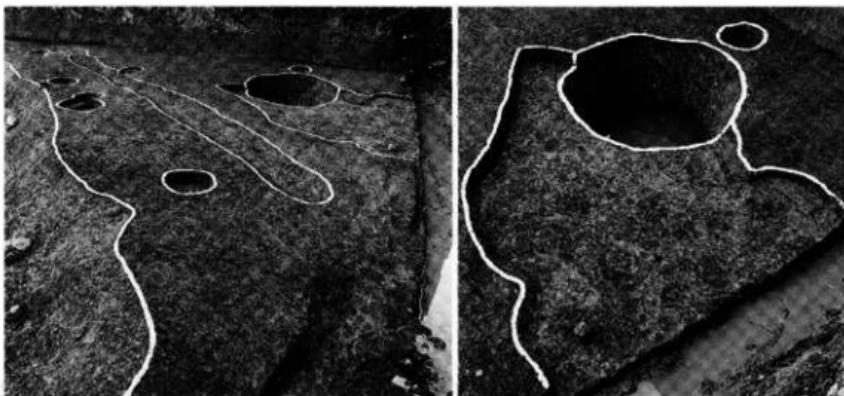
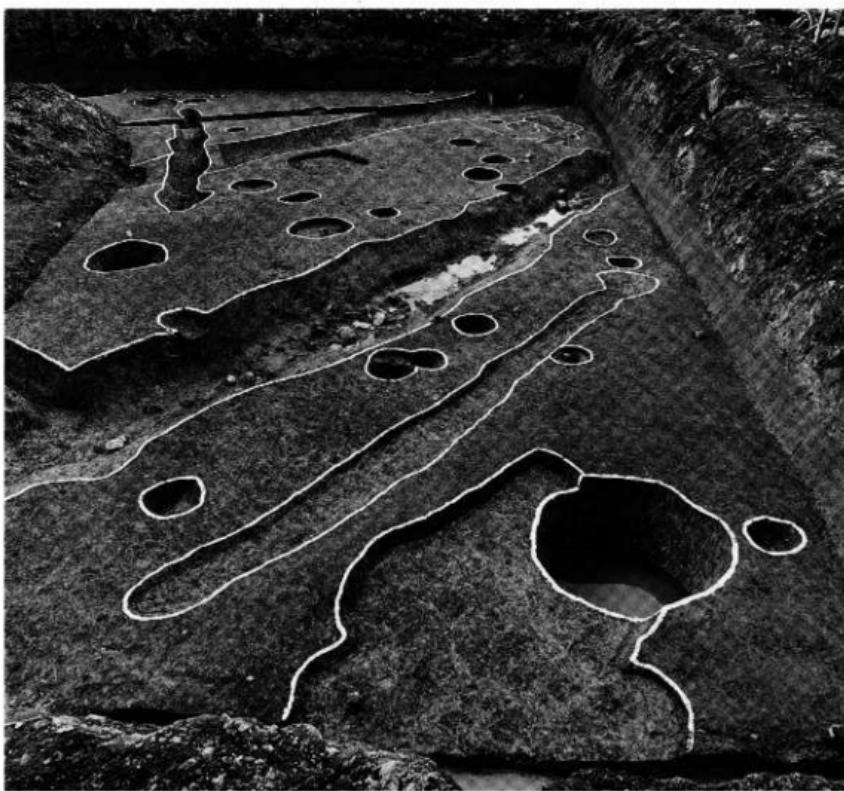
SD01～06溝及びピット群全景及び細部



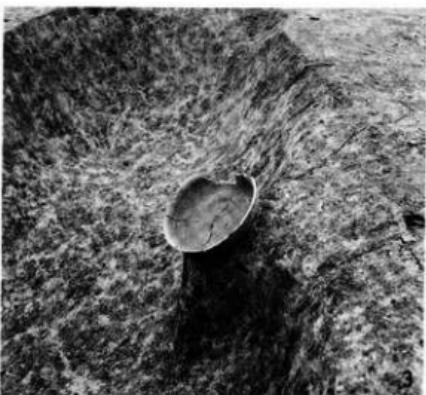
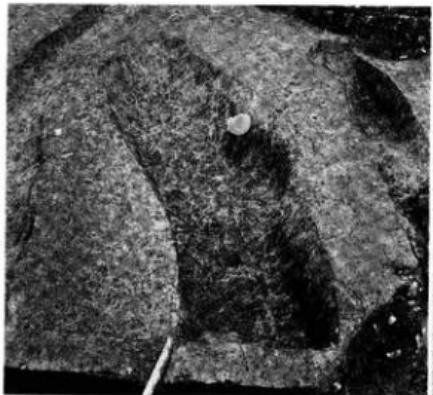
SD01溝全景及び細部



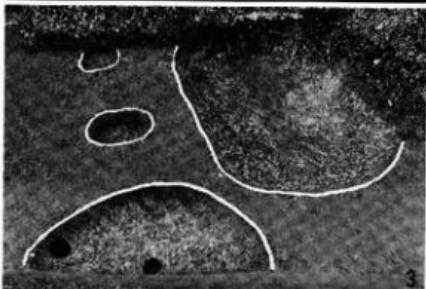
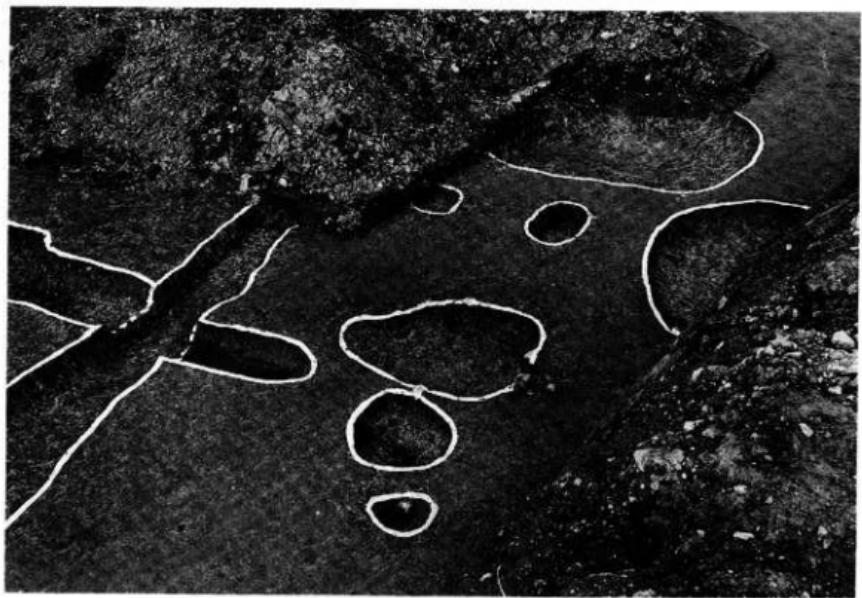
SD04溝全景及び細部



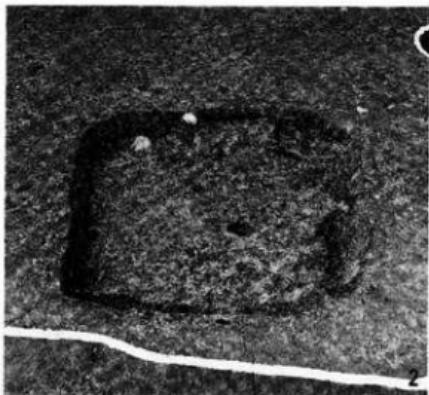
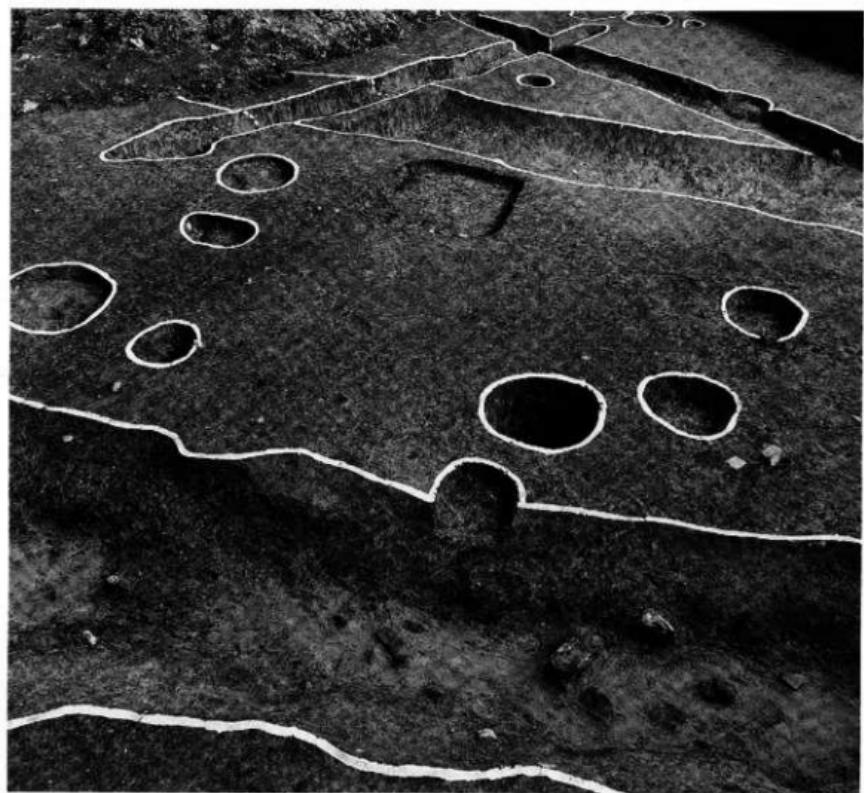
SE01井戸、SD05、04溝など及び細部



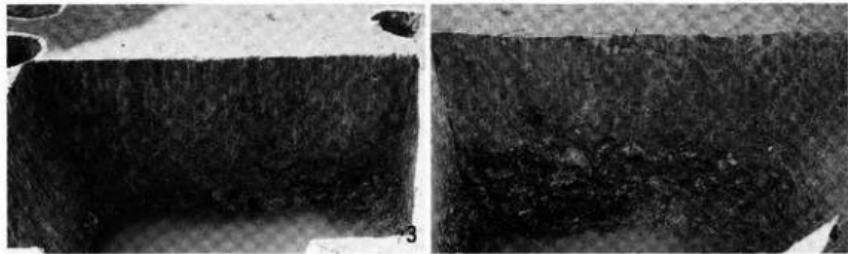
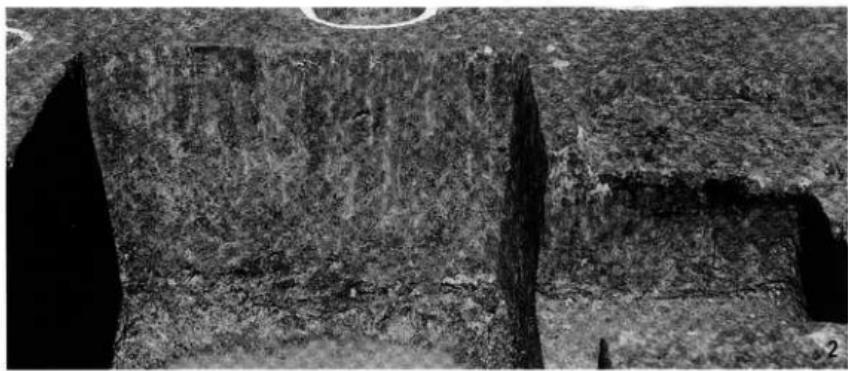
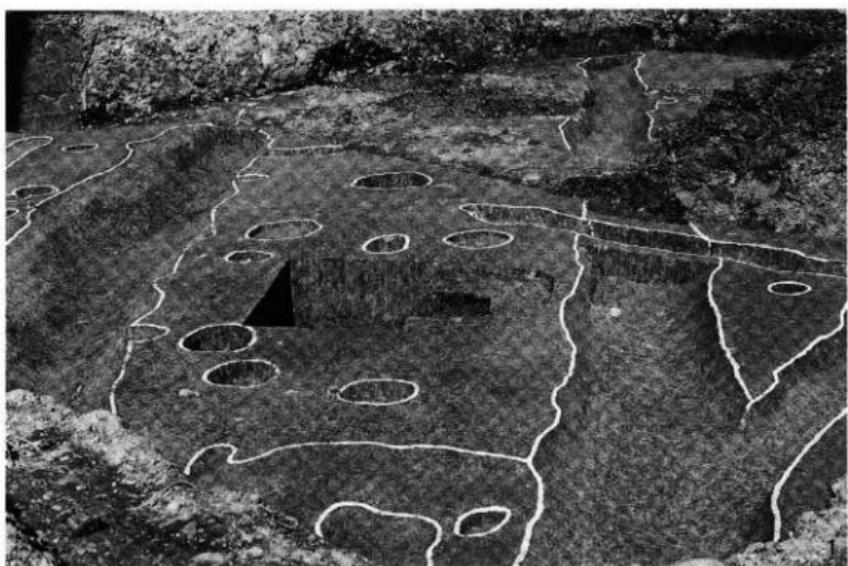
SD02、07、06溝全景及びSD07細部



SX09周辺全景及び細部



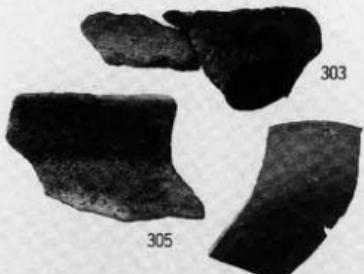
SX16及び周辺ピット群



ピット群全景(1)及び深掘りトレンチ(2,3,4)
(2: SX16深掘りトレンチ1)



76



303

18



306



42



37

15



27



15



21

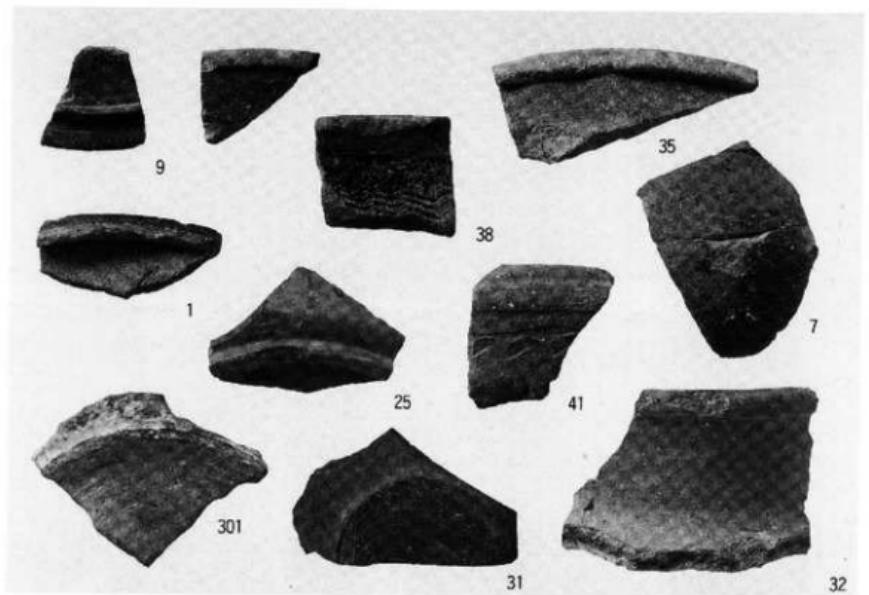
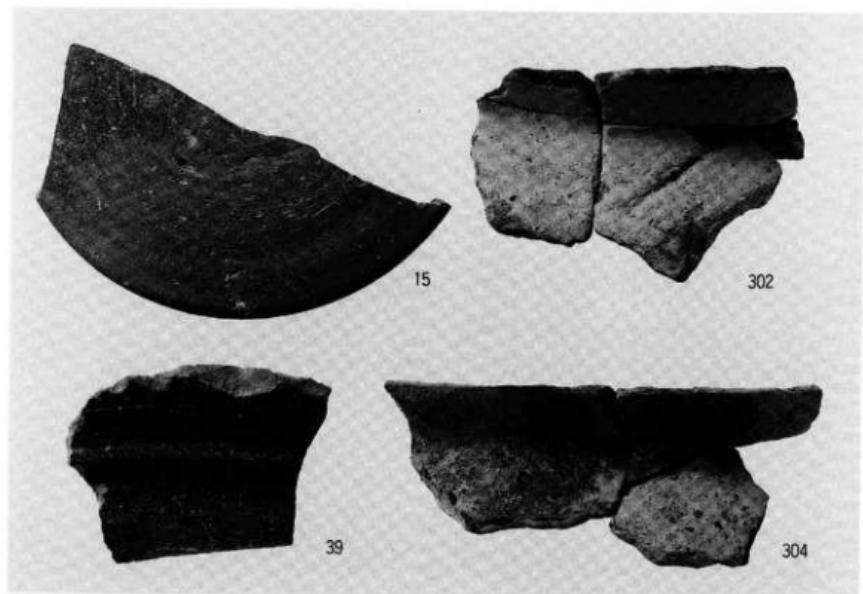


19

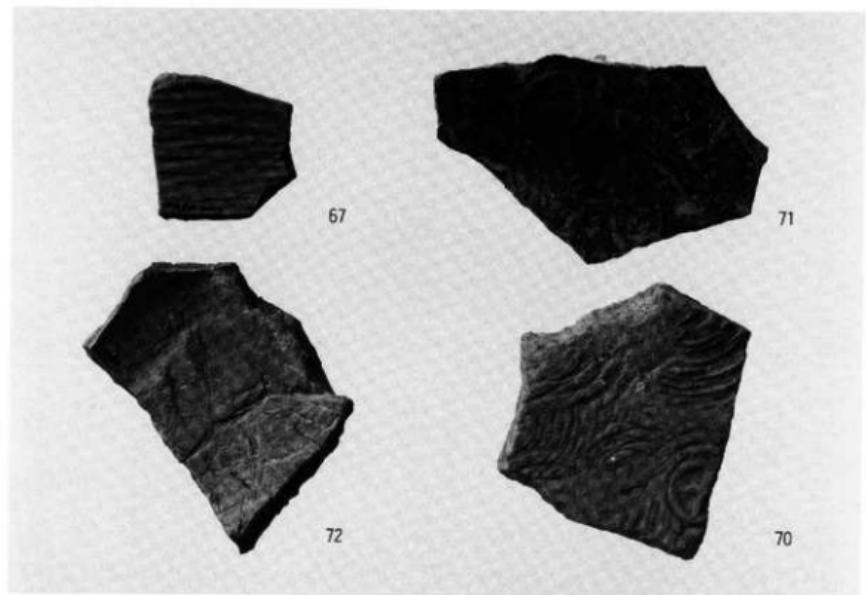
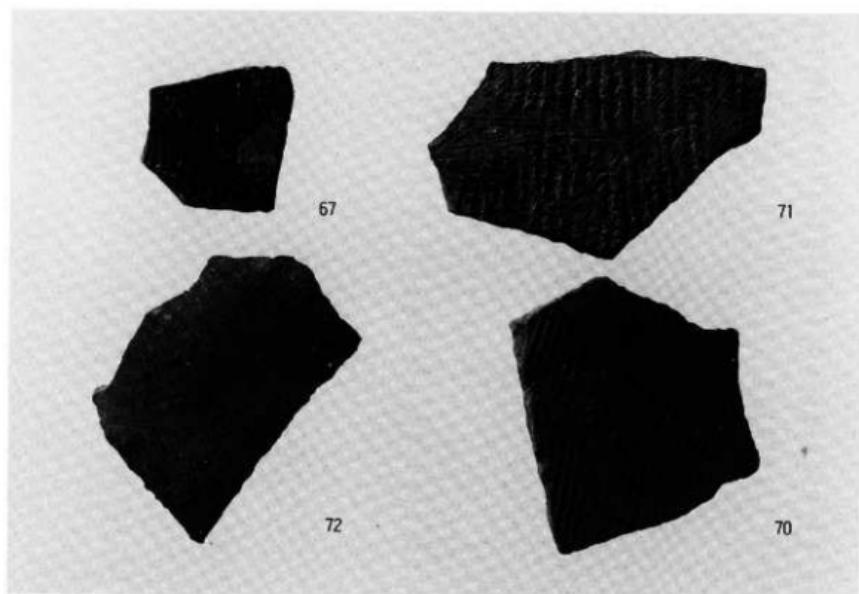


36

出土遺物（瓦、土師器、須恵器）



出土遺物（土師器、須恵器）



壺体部内外面叩きの状況

螢池東遺跡発掘調査会

発行日 1991年5月

編集 螢池東遺跡調査会

印刷 サンキ印刷株式会社
